

窓ガラスの汚れを別にすれば、この列車に不都合はなく、定刻の9時55分にパレルモ中央駅へ到着する。日曜日だから通勤・通学者はいないであろうが、近郊からの利用者は多く、満員になっていた車内から吐き出された人々でプラットフォームは雑踏する。人波が去るのを待って、行動を開始した。



有人クローク。



駅のチャペル。

アグリジェント行き乗り継ぎ列車は5番線から10時35分であることを確認。それまでの半時間ほどを旅の情報収集に利用する。帰国に備えて、空港連絡バスの停留所を知りたかったけれど、キャリーを引っ張って駅周辺を歩き回ることには不自由があり断念し、駅構内の観察に終始する。ファストフード店はマクドナルドがあり、ガラス張りで店内が透けて見える感じは日本と同様。

有人荷物預かりがあって、いざとなればカバンを預けて身軽になれるのは有り難い。ヨーロッパでもコインロッカーが増えているが、使用方法に不慣れなロッカーに荷物を入れると —— もし取り出せなくなったら —— の不安にいつもさいなまれる。



アグリジェント行き列車の入線。

荷物預かりのそばに、絵文字から一瞬コインロッカーかと思ったところはチャペルであった。駅舎の中に組み込まれているとは、さすがローマンカトリックがほぼ100%を占めるイタリアらしいと思う一方、政教分離が一般的な現代社会において、違和感を感じるのは日本的感覚のせいであろうか。

10時半にアグリジェント行き列車が入線する。乗り込む人がほとんどいないため不安になり、ホームにいたイタリア鉄道の制服を着た男に訊いてみたところ、曖昧な返事しか返ってこない。あとで判ったことだが、彼はこの列車のスタッフではなく、単に移動に利用するだけであった。しかしそのような場合でも、日本であれば鉄道のプロとして対応してくれるのだが。

そのうち乗客も幾分増え —— まず間違いあるまい —— と、進行方向左側に席を占める。しかし出発は大幅に遅れ、11時を廻ってからであった。

シチリア島のまともな地図を入手できず、いたため、トーマスクック時刻表の路線図から、す



この辺りで海岸線と別れを告げる。11時32分。



内陸部の典型的景観。右下の写真はワイン畑の中に起立する扇風機塔。霜除けか？

ぐ内陸部へ入り込むものと思っていた。それなのに何時までも海岸線を離れない。次第に不安になった頃、メッシーナ(さらにはローマ)へ行く線と別れ、右に大きくカーブした。パレルモ出発から既に半時間以上経過している。

内陸部の風景は良く手入れされた畑(葡萄が主)と、その背後に荒漠とした地肌を見せる山稜の連続

で、トラパーニ往復で見たものに似ている。シチリア内陸部の典型的景観と云うことかもしれない。晴れ上がった空に浮かぶ雲は初夏を思わせるものだ。時々見掛ける溪流は黄土色の濁水が流れている。昨晚あるいは早朝にかなりの豪雨があったらしい。

変化に乏しい車窓風景であったけれど、飽きることもなく見続け、内陸部へ分け入って約二時間後、終着駅型のアグリジェント駅に到着した。斜面に立地する変則的な駅舎で、階段二階分を登ってようやくコンコースと駅前広場のある高さに辿り着く。



アグリジェント駅。

日曜日

コンコースの中に、キオスクを彷彿させる

ような独立した小屋の観光案内所がある。しかし日曜日のためか窓口は閉ざされたままだ。駅前広場には市街平面図があり、駅から数百メートルの街中心部にも観光案内所があるらしい。これとても閉まっているかもしれないが、辺りを見回してもホテルの看板など見えない以上、行動するしかない。

案内所への道は鉄道に平行し、ほぼ水平を保っている。2分ほど歩くと、右側にホテルの看板を見付けた。しかし急な階段を登った上にあるらしいし、看板の粗末さから、ホテルそのものの質も疑われる。空身であれば気軽に「駄目元」で寄り道を出来るが、キャリーを引っ張っているとそうは行かない。—— まず観光案内所へ —— と内心で言い訳し、水平の道に行く。

しかし平坦はいくらも続かず、急な上り坂になった。途中ですれ違った若い女性に、観光案内所の所在を尋ねると、口ごもる。要するにあるけれど閉まっていると云うことらしい。それならば街の中心部を歩き回って宿を探すしかない。分岐してUターンする坂道を登って行けば良いと彼女が教えてくれる。ともかく現状では前進するしかない。

まもなく上り坂は終わった。石畳の街路は落ち着いた雰囲気が好き、商店も多いけれど、日曜日のためいづれも休業で行き交う人もない。相変わらず宿の存在を感じさせるものはなく、尋ねようにもその相手もない。

ようやく数人の観光客グループとすれ違い —— もしや彼等の宿がこのそばに... —— と藁をも掴むような気持ちで言葉を交わす。感じの良い人達であったが、思惑は見事に外れた。やむなく前進を続けると、すぐそばの街路分岐点にB&Bの案内板を見付ける。

これを頼りに細い路地を辿り、30メートルほどのところでB&Bの玄関があった。ブザーを押すとすぐに反応があり、経営者らしい中年カップルがドアを開けてくれる。イタリア語と身振りでシングルルームはないと云われるが、これはツイン料金50€(7,234円)を支払うことを四苦八苦して伝え解決。ともかく部屋を見せて貰う。

階段を三階まで登り辿り着いた部屋は、設備内装はともかく、裏手に面し眺望がさっぱりだ。この辺りは南斜面の高台に位置し、遺跡の集中する神殿の谷や、さらにその向こうには海まで見えるはずなのに、この部屋からは隣家の外壁が目の前に立ちはだかるばかりだ。瞬時考えてもう少し探すことにした。いざとなれば此処へ戻ってくれば良い。

ほとんどこのB&Bで妥協しそうな気分であった。それでももう一頑張りする気になれたのは、時刻が1時半と十分に早かったこと、気分はともかく体力的には全く消耗していなかったし、加えて天候に恵まれていたためだ。氷雨でも降っていれば、再びその中へ足を踏み出すことは出来なかったであろう。

旅もまた人生の一部だから、努力すれば報われるとは限らない。しかしこの時は呆気ないほどすぐ報酬があった。先程の分岐からメインストリートに戻り、50メートルばかりのところの垢抜けたB&Bの看板があり、インターホンから部屋を探していることを告げると、英語で「諾」の返答が流れてきたのだ。

遠隔操作でドアのロックが解除される音が聞こえる。十坪ほどの玄関ホールはガランとしているけれど、正面にエレベーターがあり三階へ。フロントカウンター替わりの小テーブルが置かれた部屋にいたのは、小太りで美人とは言い難いが、表情や話し方に知性の感じられる年配婦人であった。

英語が通じれば話の進行は速い。部屋を見せて貰い一泊40€(5,787円)を確認して二泊を即決した。先程のB&Bと比較して優る点を列挙すれば、眺望、英語が通じること、エレベーター設備、



泊まったB&Bのあるアテネア通り。



B&B Atenea 191。



宿から眺める神殿の谷方面。

おまけに安価と来れば、僅かな頑張りでその見返りは充分すぎるほどのものであった。

パスポートを渡してチェックイン手続きをする。次いで彼女は —— 朝食はこちらで —— と、先に立って建物の西端まで行く。趣味良く内装された居間風の食堂があり —— 雨が降れば此処を使うけれど —— とさらに階段を登る。宿泊部屋にも増して気持ち良く眺望の広がる屋上テラスにテーブルが五つ置かれ、彼女のどこか誇らしげな表情も納得の行く朝食の場だ。

フロントへ戻って鍵を渡される。街路から入るドア、エレベータを上がってB&B部分の入り口、そして個室の三つ組。チェックインに関わる一通りを終え、付近のお勧め郷土料理レストランを尋ねた。彼女は アテネア通りを見下ろす窓辺へ行き、街路を見るようながしながら説明してくれた。徒歩3分もあれば行けそうだ。

出掛ける前に市街平面図があるか尋ねると、周到なことで二種類を手渡してくれた。遺跡を中心とした詳細図と、もう一つはアグリジェントの市街地、観光目玉と云うべき神殿の谷、さらにその向こうに位置する港町 San Leone までを含んだ広域図だ。

時刻は2時を廻っていたし、列車や宿探しのストレスから解放されたことで、空腹感が一気に頭をもたげる。朝から水しか飲んでいない。教えられた食堂 L'Ambasciata (大使館) di Sicilia は小体で寛げる雰囲気の大衆食堂だ。室内部分には既にかかなりの客がいるように見受けられたが、見晴らしが良く、天候に恵まれたこの日など、絶好の食事場所と思われるテラス席に先客はなかった。

簡単なイタリア語メニューと、それでも格闘し、海の幸スパゲティ(Spaghetti ai furtti di mare)を決め、英語を話さぬオヤジとのコミュニケーションでルッコラサラダと白ワインの1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>デカンタを注文した。

ワインを飲みながら料理を待つ。眺望そしてそよ吹く風、申し分ないと思っていたが、腿の辺りがジリジリと熱くなってきた。頭上には日除けがあり、おおむねそれが日射しを遮っているけれど、晩秋の深く傾いてきた太陽の位置により、腿の辺りが直射日光により炙られていたのだ。10月下旬になってこのような体験は全く予想外のことであった。なるべく隅へ椅子を移動する。

隣のテーブルにアメリカ人(?)の若いカップルが来ただけで静けさは保たれ、豊かな気分の昼時を満喫できた。海の幸スパゲティの味わいは上々であったし、加えてルッコラサラダと白ワインのコンビネーションも簡素でありながらなんの不足もない。幸せな昼食を一時間後に終え、勘定は席料2.1€(304円)、スパゲティ7.3€(1,056円)、ワイン1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>5.5€(796円)、ルッコラサラダ3.2€(463円)であった。



L'Ambasciata di Sicilia のテラス席。



海の幸スパゲティとルッコラサラダ。

## 神殿の谷（Valle die Templi）

神殿の谷は旧市街から4、5キロのところであり、徒歩での訪問者は稀であろう。しかし路線バスの停留所や番号を調べていなかったこともさることながら、見知らぬ街との出会いでは、迷いつつ歩くことにより、そこに対する地勢的なイメージを形作ってゆきたい。市街平面図を度々参照しながら坂道を下ると、広



ユーノー神殿遠望。

大な疎林地帯の中に点在する遺跡が、次第にその姿を大きくして行く。歩き始めて一時間ほどで、最初の由緒ありげな石積みの建物が道路右側に見えてきた。

付近に設けられた駐車場に車はなく、鉄柵で囲まれた敷地内にある洒落たカフェも閉じられている。訝しく思いながらも順路だからと近づくと、休館日に当たる考古学博物館であった。

さらに下り坂を10分ほど行くと、急に辺りの人が増え、土産物屋、公衆

トイレ、カフェ、駐車場などを中心として、道の左右に遺跡群へのゲートがあった。まずコンコルディア神殿から見物しようと、交通量の多いバス道路を横断し、ゲートまで50メートルほどの



考古学博物館に隣接する聖ニコラ教会。

斜路を登った。しかし此処の詰め所では入場券を発売して居らず、バス道路を渡った向こうにある、駐車場隣の発券所へ行くと追い返される。

不親切なシステムと内心罵るけれど、喧嘩にもならないから、云われた通り入場券を6 € (868円)で買って出直す。ゲートで入場券にパンチが入れられ中へ。この時には料金システムの全容を理解していなかった。

幅8メートルほどの簡易舗装された歩道が、神殿などの遺跡が連なる丘陵を背骨のように貫いている。ツアー、グループ、家族、個人、様々に見える見物人が、三々五々途切れずに行き来していた。



考古学博物館からの下り坂で、上ヘラクレス神殿、下コンコルディア神殿。



コンコルディア神殿。



ヘラクレス神殿。

緩い上り坂が続き、馬の背状の小高いところにあるコンコルディア神殿がせり上がるように見えてくる。解説書によればドリス様式で、柱を支える台座がないのがその特徴とか。紀元前5世紀の創建なので約2500年の風雪(シチリアに雪は降らないか?)に耐えたと云うことになる。

尤も、保存状態が良いのは6世紀にキリスト教のバジリカに転用されたため破壊を免れたとのことだから、遺跡にとって脅威は自然よりも人間と云うことらしい。

見事な遺跡を前にした感興をそいでいるのが修復工事用の足場で、写真を撮っても「作品」としては採用しがたいものになってしまう。このような状態にその後シチリア各地で遭遇し、当初は——財政状態が良いとは思えないシチリア(イタリア)でこれほど盛んに工事を行えるとは——と、驚いた。しかし冷静に考えてみれば、逆に財政状態が悪いから、一気に完成させることが出来ず、不本意ながらも工事中状態が続いているらしい。裏付けのない憶測ではあるが。

遺跡を貫く脊梁道路をさらに行けばユーノー神殿がある。しかし明日も丸々遺跡見物に使えることを考えれば——何もそれほどむさぼるようにならずとも——の気分で引き返すことにした。入り口付近のヘラクレス神殿に、ちょっと寄り道。アグリジェントでは最古の紀元前6世紀創建。しかし聳立する八本の柱は1924年からの工事で復元されたものだ。

バス通りを渡ったところの駐車場で観光案内所の小屋を発見。こちらはオープンしている。B&Bで入手したものと異なる市街平面図があり、これとその他パンフレットなどを貰う。ちなみにアグリジェントに観光案内所は地図上に記載されているものを数えると七つもある。運営が州であったり、県、市など色々しいけれど、詳細は不明。休みも違えば、用意している資料も異なる場合があるようだ。

案内所でバスチケットの購入場所と路線番号を訊き、すぐそばのカフェでチケット0.9€(130円)を購入。カプチーノを飲もうかと思うが、混雑している様子を目にして取りやめ、まもなくやってきた路線バスに乗る。空席が半分程度の混み具合だ。カフェの近辺にはかなりの観光客がいたのに、バスを利用するのは二、三人しかいなかった。5時をちょっと廻った頃、駅前に到着する。

黄昏始めた旧市街を散策する。変化のある斜面に貼り付いた街は、路地も複雑で面白い。商店は全てお休みだった。市街探訪も明日の楽しみに残し、半時間ほどで宿へ戻った。四階にいるらしい女主人に声を掛け、テラスでカプチーノを飲めないか訊いてみた。到着時に案内された折 —— いつでも利用できるから遠慮せずに、 . . . —— といわれたのだ。



宿の屋上テラス。

すぐに姿を現した彼女は、笑顔で応じてくれた。神殿の谷でカプチーノをあっさり諦めたのは、こちらの方が魅力的に思われたことにもよる。屋上に出てみると、黄昏始めた柔らかな光を浴びて雄大な眼下の風景は、予想していたとはいえ申し分なく、そしてこの場を独り占めしていると思えば、(金も掛けずに)ずいぶんな贅沢をしている気分になる。

女主人と雑談を交わす。今日訪れたところや、考古学博物館が閉まっていたことなど話すと —— ともかく考古学博物館は素晴らしいから、是非行くべき —— と勧められた。

そのうち眼前の樹に飛来する野鳥の話に替わり —— アフリカから渡ってくるけれど、今年は二ヶ月も早かった。朝夕の囀り声がうるさくて閉口している —— とこぼす。総じて特別内容のある話柄ではないけれど、夕方の一時にカプチーノを飲みながら、のんびり過ごすには手頃なものであった。

部屋へ戻りシャワーを浴びてから晩酌を開始する。小バルコニーへのドアを開け放したままで、寒さを感じることもなければ、騒音に悩まされることもない。確かに鳥たちの囀りは間断のないざわめきとして流れてくるものの、それも長閑な黄昏どきをむしろ際立たせている。

夜中に何度か目を覚ますと、いつも鳥の囀り声が密やかに聞こえた。夜を徹して何をささやきあっていたのだろうか。



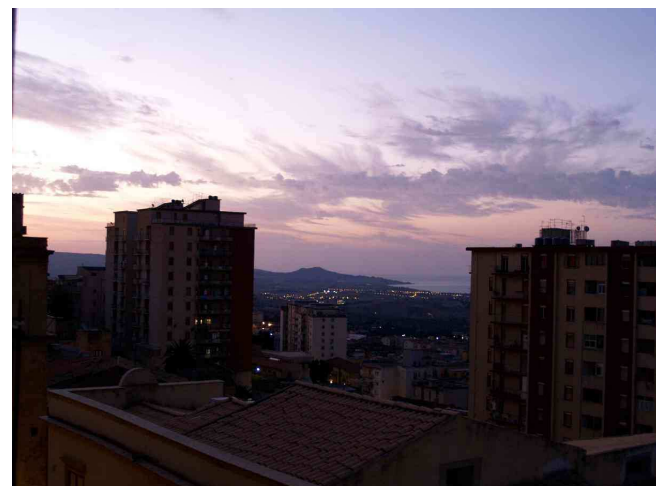
晩酌しながら表を眺める。



ねぐらとしている樹に戻ってきた渡り鳥。

## 神殿の谷 (2)

10月24日は穏やかな夜明けであった。旭日を撮影出来ればと期待していたが、薄く広がる雲に遮られてしまった。朝食は8時半からとのことだったので、待ち時間を利用して「芸術と歴史の島 シチリア」のアグリジェントを再読する。



7時3分。



沿岸を行くクルーズ船。

8時半に屋上テラスへ行くと、既に二組が食事中であったけれど、手摺り際に眺望の良い席が空いていた。カプチーノを頼んで彼方に視線を巡らすと、クルーズ船がゆっくり東へ進んで行く。シチリアの主要な観光地はその大半が海岸近くにあるから、クルーズ船で巡れば、効率と優雅さを両立できそうに思われる。しかし(高額であろう)費用のことを度外視しても参加

する気にはなれない。団体旅行は嫌いだし、ましてクルーズ船は一人で乗るものではないから。

9時に宿を出て、神殿の谷方面バスを利用するために駅へ向かう。昨日とは打って変わり、沿道の商店は開店、あるいは開店準備に忙しく、道行く通勤通学の人波も途切れない。駅の観光案内所も開いていたので、バスのチケット売り場を尋ね、駅の売店で購入。

まもなく到着したバスに乗り込むのは四、五人。朝の忙しい時間帯かもしれないけれど、殺気だった雰囲気はない。最後に乗り込んで地図を拡げ、運転手に考古学博物館へ行きたいことを伝える。彼が了解してくれたとは思うものの、全面的にまかせず、自分なりに乗り過ごさぬよう注意した。

昨日のバスルートを逆に辿るから、現在位置と目的地の位置関係は把握できる。途中からは徒歩で辿ったところだから、記憶はさらに詳細だ。—— あと500メートル、400メートル... —— とカウントダウンしていったが、運転手はなんの反応も起こさず、バスが減速することもない。堪りかねて運転席に近づき声を掛け、まさに横を過ぎ去って行く博物館を指した。

彼は判っているとばかり肯きながらも、前方を指し何事か云う。周りの乗客も口々に云うのは **biglitto** (チケット) か。事態は依然理解できないものの、通過しなければならぬ理由があることは確かだ。まもなく昨日の駐車場やチケット売り場が固まっているところへ至り停車した。運転手は自信の溢れた表情で —— 此处が正しい場所 —— といった身振りをする。

ともかく此处まで来てしまったから、付近にあるユノー神殿などを先にして、博物館はその後の気分にかけることにした。それほど見たいとは思っていない。こんなつもりで発券所へ行くと —— 考古学博物館も込みのチケットにするか? —— 訊かれ、面倒だからそれを指定すると、たたみかけるように —— 考古学博物館は午前中で閉館されるから先へ行け —— と指示される。

予想外の展開であったけれど、800メートルの緩い坂道を辿るうちに、状況がおおむね推定できた。神殿の谷地区は、一カ所でしかチケットを売らず、バスの運転手はそれを考え降り場所を教えてください、乗客が口にした **biglitto** の前後は、そこら辺の事情を説明してくれたのであろう。昨日は50メートル戻らされただけで腹を立てたが、こちらならば800メートルだ。

考古学博物館の入り口に着いてみると、推定に間違いはなかった。しかし入場券も売れないほど人員を絞り込んでいるとも思えない。根本的発想が違うのだろうか。



考古学博物館の中庭。



アグリジェントとその周辺からの出土品を収集したこの博物館は、その内容においてシチリアで第一級に評価されているらしい。確かに充実を感じさせるし、展示も洗練されている。

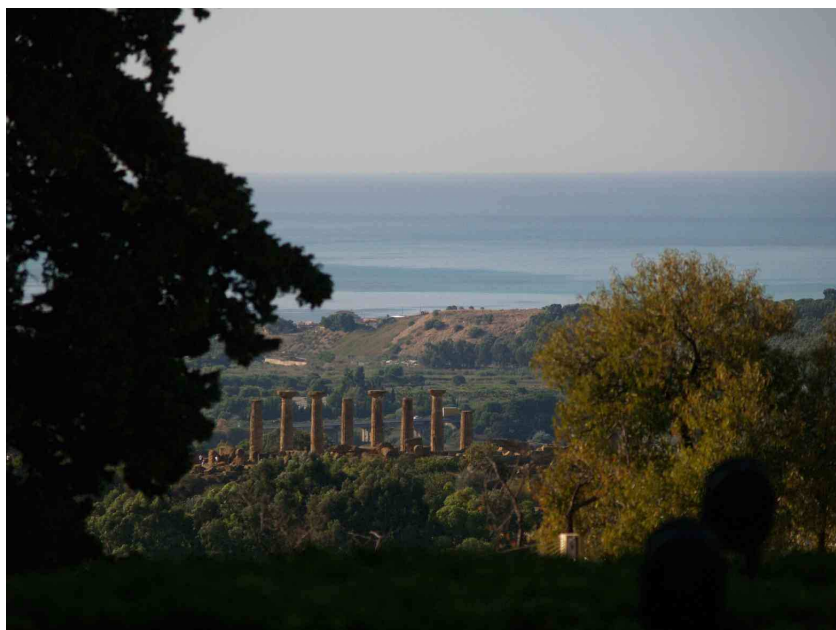


博物館内部。右はユピテル神殿からの出土品で、神殿を支えていた男像柱。

しかし博物館を見物して興味が湧かないのはいかんともしがたい。例えば二千数百年を経た陶器を見て、これを作った陶工、それを利用した人々の息づかいと云ったものが感じられるか否かで別れるのであろうが、唯の壺にしか見えないからすぐに飽きてしまう。結局素晴らしいコレクションも「猫に小判」となり、15分ばかりで館内を一巡し外へ出てしまった。

入場料は遺跡だけであれば6€(868円)で済むのに、博物館を加えたため10€(1,447円)支払い、おまけに800メートルの坂道を登って来た。しかし全くの骨折り損かと云えば、そうでもない。この辺りから遠望する遺跡は、観光客の姿など全く見えないし、背景に海を配して眺めれば二千年を越える悠久の時間がそこはかたなく感じられる。

もう一つの収穫は、敷地内の林間にあるカフェで、昨日これを鉄格子越しに見たときから楽しみにしていた場所だ。時刻が早いせいか客はいなかったけれど、二人のスタッフが笑顔で迎えてくれる。



考古学博物館から遠望するヘラクレス神殿。



博物館敷地内のカフェ。右写真に見える大型で強力な日除けが流行らしい。

10月も下旬だというのに、木陰に席を選び、林間を吹き抜けてくるそよ風が心地よいのもシチリアなればこそか。豊かな気分でカプチーノを味わい、深く椅子に腰掛け上天を仰ぐと、雲一つない青空は朝方よりその深みを増して冴え渡っていた。

代金1.5€にチップを加え2€(289円)をテーブルに置き考古学博物館をあとにした。先程も通り、昨日は同じ方向へ歩いた道ではあるが、なだらかな下り斜面の彼方に見える、遺跡と海原を眺めながらの散歩気分は悪くない。二組ばかり考古学博物館を目指しているらしいカップルとすれ違い、やはり入場券が一カ所でしか買えないのは理不尽だと思う。



カストルとポルクス神殿。



遺跡に住む野良犬は気立てがよい。またそうでなければ駆除されてしまうであろう。しかし歓迎してくれたのは良いけれど、大型犬に泥足で跳び付かれるのには閉口した。

遺跡地区はバス通りを挟むように拡がり、昨日は東側を訪ねたので、今日は西側地区から見ることにした。ちなみにチケットには1、9、10、12の枠がスタンプされ、昨日東側地区のゲートでは9枠のところにパンチされた。今日はどうした訳か一つもパンチされなかったため、西側地区が何番か判らず、さらにそれ以外の二地区がどこにあるのかも未だ知らずにいる。

ゲートのところで大型バスから吐き出された団体と遭遇したので、彼等が遠ざかるのを待ち、人通りが少なそうな径を選ん

だ。別段順路といったものは設定されていないようだ。

しばらく行くと大型の野良犬が出迎えてくれた。犬好きだからつい頭を撫でたりすると、向こうも好意を表明してくれる。汗ばむような強い日射しのもと、後になり先になりしばし連れ立って歩いた。

ゲートから5分ほどで広場のような場所に出た。犬は別のものに興味を引かれたのか去って行く。広場の中央には四本の柱と屋根の残骸のみを残す廃墟があり、これがカストルとポルクス神殿らしい。ちなみにカストルとポルクスの名前になんの記憶もなかったもので、帰国後調べたところゼウスとレダのあいだに生まれた双子らしい。双子(星)座はこの二人が星になったものとか。

閑話休題。コンコルディア神殿などに較べると破損の度合いがひどく、隣接するデーメーテル聖所や円形の階段席(劇場とも思えない。使途不明)も併せて辺りには荒涼とした雰囲気漂う。見物人も数人が散らばるだけで、遺跡としてはかえってそれらしいとも思われる。

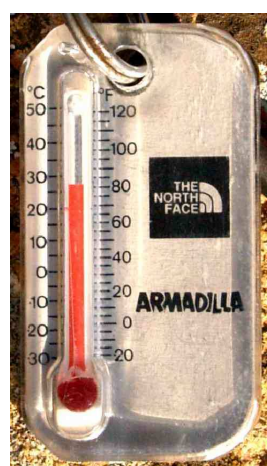
ルートを変えてゲートの方へ戻って行くと、石切場の屑置き場を思わせる所にてた。そのようなものがあるはずもなく、不審に思い一枚撮影。後刻「芸術と歴史の島 シチリア」のページを捲ってユピテル神殿の無惨な残骸と知った。



ユピテル神殿を支えていた男像柱(テラモン)。考古学博物館にあったのがオリジナルで、こちらは横たわる形で再現されたもの。



ユピテル神殿の柱頭部分。18世紀までは公共建造物の資材調達に利用されたため、無惨な姿になっている。



湿度が低いためか不快とは感じないものの、強い日射しを受け、少し急いで歩いたりすると汗ばんでしまう。持参の寒暖計を見ると27℃を示していた。メモを取る代わりに一枚撮影。

ゲートまで辿り着いて時計を見ると、まだ11時だ。旧市街へ戻っても昼飯には早く、カフェに行くか遺跡めぐりを続行するか迷った。—— 観光客の右往左往するところで、何かを飲んでも快適なものではあるまい —— を結論に、コンコルディア神殿から、さらにその先にあるユーノー神殿を見物する。

バス道路を渡り、反対側のゲートを通して10分でコンコルディア神殿、さらに10分でユーノー神殿がある。丘陵の背を貫通する砂利舗装の遊歩道は、歩きやすいものの面白味には欠ける。途中で日本人団体とすれ違うが、割とこぢんまりしたものであった。

ユーノー神殿は脊梁道路からちよつと南



ユーノー神殿付近から見上げるアグリジェント市街。手前には中高層ビルも目立つが、旧市街は丘の頂上に近い部分。



ユーノー神殿。

側に外れた小高いところにある。補修工事用の足場に覆われた西面を見ながら近付いたときは、魅力的と思えなかったけれど、小径に導かれ東側に回り込んでみると景観が一変する。足場が目立たなくなったこともさることながら、背景に青く澄んだ海原を見晴らすのが心にしみる。

ギリシャ人の信仰がどのようなものであったのか、あまり想像も付かないので、彼等がこの神殿に詣でたとき、何をどのような目で見ていたかも推測しがたい。しかし神殿建設の地として此処を選んだとき、背景としての海が無関係であったとは思えない。いま此処から見る景観と、2500年前とに相違はほとんどないと思えば、つい自らの視線を彼等のそれに重ねてみたくなる。

平面図(遺跡地図)からすれば、見残している遺跡もあるけれど、今日のところは堪能(食傷)した気分だ。入場券売り場付近まで戻り、バスで旧市街へ帰った。

宿のそばのインターネットカフェでメールをチェックする。昨日は日曜日のためほぼ丸一日未チェックだった。女主人が教えてくれたカフェで、宿の玄関から直線距離にすれば100メートルもない。実際この距離は有り難く、アクセスを開始後、忘れていた老眼鏡を部屋まで取りに戻ったくらいの近さであった。

この店のシステムはかつて経験のないもので、時間を申告して磁気カードを購入する。これをコンピュータのカードリーダーに差し込めば、その時間だけ利用可能。時間内にカードを引き抜けば次回に残りを使用できるし、チェーン店であればよそでも利用可能。常連にとってはそこそこ便利だと思うものの、一回限りで、この店もチェーン店も今後利用する可能性がないと無駄が多い。ちなみに一時間分4.3€(622円)を支払いながら、実際に利用したのは半時間ほどであった。

空振りのメールチェックと、若干のインターネット情報検索を終え、昼食にテーマを代える。昨日の食堂が気に入っていたのにお休み。パレルモでホテル・トニックのフロント係が———月曜日は休みのレストランが多く...———といていたことを思い出す。日曜の代休か。

Atenea 通り界限は、バル、カフェこそ多いものの食堂は少ない上、意に合うところがない。もつとも、この時点では昨日、オープンテラスで摂った昼食の心地よさが忘れられず、ひたすら同様のところを探していた。

駅の付近まで搜索範囲を広げる。駅前広場の南側斜面に立地するホテルを探し当て、此处ならば見晴らしも良さそうと期待する。しかしようやく見付けた入り口から中の様子を窺うと、マネージャーらしい中年男がロビーで暇そうに新聞を読んでいるだけで、レストランなどを営業している雰囲気はまるでない。

下降線を辿っていた「意気」は最低レベルまで落ち込んだ。眺望を放棄したばかりか、パレルモ以来のパスタ路線も放棄し、駅から東へ向かう大通りを僅か行ったところで、半地下に店を構えるピザ中心のレストランに入る。

店内は思ったよりも広く、古い穴倉を改造したような印象を受けた。表の喧噪から隔絶されているのは当然として、落ち着いた照明と趣味の良い内装が好ましい雰囲気を醸し出す。運勢が多少好転したのか、数人のウェイトーの中には英語を話すのもいたけれどお品書きはイタリア語のみだった。

ウェイトーにはメニューの検討に時間がかかることを告げ、電子辞書を引しながらあれこれ考えたものの、結局は無難なミックスピザとトマトサラダになってしまった。

ワインを飲みながら待つこと10分、到着したピザはさすが本場のピザ屋と納得させる上質のものであった。しかしアメリカ流の食べ方が染みついているため、タバスコが欲しくなるのは困ったものだ。



上は穴倉を改造したような店内。下ミックスピザとトマトサラダ。



宿で飼われていた白ウサギ。屋上テラスの入り口にいる。

40分ほどで食事を終える。勘定は席料1.5€(217円)、ピザ6.9€(998円)、トマトサラダ2.5€(362円)、赤ワイン1壇8€(1,157円)。

昼寝をするつもりで道草は食いながらも、これといった寄り道はせずに帰る。しかし昼食後にカプチーノその他を飲まなかつたことを、何となく治まり悪く感じていたので、屋上テラスで雑談付きのカプチーノを楽しむ。その後、昼寝を終えて街へ再度出掛けたのは4時近かった。

まず斜め向かいと云って良いような近さにあるプルガトリーオ(Purgatorio)教会。度々前を通過しながら、先を急いでいたり、ドアが閉ざされていたりして、内部を見る機会がなかったところだ。今は丁度ドアが開け放たれ、ボランティアらしい女の子が門口に笑顔で立っている。ちなみにPurgatorioを辞書で調べたところ煉獄と出てきた。煉獄教会？

閑話休題。一步踏み込むとそこは豪華絢爛たるバロックの世界であった。ドーム天井のフレスコ画や、壁の装飾も素晴らしいけれど、よそではあまり見掛けないのが女性の彫像群だ。各像の台座に刻まれている文字を調べてみたところ

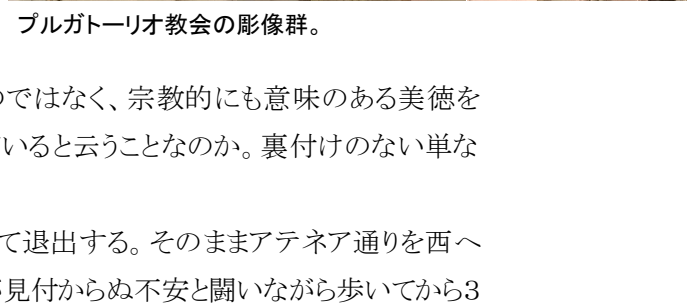
Charitas(愛徳)、Fortitudo(強さ)などの意味らしく、すると具体的(あるいは伝説的)な

女性を意味するのではなく、宗教的にも意味のある美德を女性像で抽象していると云うことなのか。裏付けのない単なる推測。

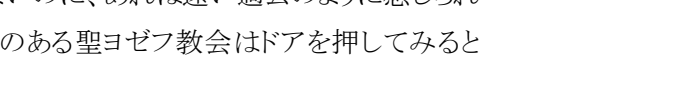
中を二周ほどして退出する。そのままアテネア通りを西へ向かう。昨日、宿が見付からぬ不安と闘いながら歩いてから30時間も経っていないのに、あれは遠い過去のように感じられた。瀟洒な時計台のある聖ヨゼフ教会はドアを押してみると



プルガトリーオ教会。



プルガトリーオ教会の彫像群。



Purgatorio 教会内部。



聖ドメニコ教会と右側に隣接するピランデルロ劇場。



カテドラル内部。

するとサンタ・マリア・デイ・グレーチ (Greci: ギリシャ) 教会だ。帰国後の調査では、ギリシア神殿の基壇の上に創建されたものとか。豪華さなど何もない礼拝堂では、ひっそりとミサが進行していた。

びくともしない。すぐ隣と云っても良いピランデルロ(彼はアグリジェント出身)劇場の前を通り、聖ドメニコ教会を訪ねる。

内部はプルガトーリオ教会に較べ、庶民的な感じがし、それと共に日常的信仰の場として機能しているように思われた。短時間の見物中にも、祈りを終えて退出する人や、新たに訪れる信者が絶えることなく続く。

聖ドメニコ教会の横から急な坂を登る。一ブロック行くと、車道は水平方向へ繋がり、真っ直ぐ行く径は階段を間に挟んだ歩道となる。幅2メートルほどで住宅の門口が連続する、生活感に溢れた路地だ。仲間とサッカーボールを蹴ることに打ち興じていた少年が、東洋からの旅行者と認めて、にやりと笑い手を挙げたりする。

狭い径は地図の上で現在位置を確かめにくいけれど、一番高いところを目指せば、暫定目標であるカテドラルへ行き着けると思えば、とにかく分岐に面したら登りを選ぶ。半時間ほどでカテドラルの名にふさわしい堂々たる建物が見えてきた。11世紀後半創建らしい。

いかにもロマネスクらしい武骨な外観であったが、一步踏み込むと華麗なバロック装飾が展開される。この感じはプルガトーリオ教会をすぐ想起させ、そして同様に日常的な祈りの場とは異なる、一種の他人行儀な雰囲気漂っている。

カテドラル前の道は車道でほぼ水平に延びている。歩くには楽かもしれないけれど、面白味に欠けること甚だしい。再び斜面の迷路に踏み込んだ。完全に迷ったとしても、ひたすら下れば鉄道にぶつかり、そこから宿への道を見付けることはたやすい。

雰囲気の良さそうな路地を選びながら、下降と水平移動、時々登りを繰り返しながら彷徨う。こぢんまりして特別目を惹くものがないのにどこか気になる教会があった。地図を参照



サンタ・マリア・デイ・グレーチ教会。ミサが執り行われていた。

半時間ほどで聖ドメニコ教会前に戻った。5時を少し廻ったばかりだが、市街周遊も堪能した気分になり、商店の多いアテネア通りをウィンドウショッピングを楽しみながら宿へ向かう。途中スーパーマーケットでミネラルウォーター(炭酸)500cc0.31€(45円)、ジン700cc5.58€(807円)、ミネラルウォーター2ℓ0.5€(72円)、ハム116g1.15€(166円)、ヨーグルト500cc2個3.22€(466円)など購入。宿で規定量を呑み、この晩も野鳥のささやきを子守歌に安眠する。

### 長距離バス

10月25日も穏やかな夜明けだった。今日の目的地、カタールニャへはバスで移動する予定だ。

話は前日に遡る。当初は鉄道利用を考えていたが、宿の女主人に相談すると——— 鉄道が好きなのは判るが、アグリジェントからカタールニャへ列車で行くなど...——— と、何か考えるだけでもおぞましいと云った表情を浮かべ、バス利用を強く勧められた。確かに鉄道の方を好むけれど、別にマニアというわけでもないし、これまでも各国でバスの恩恵にも与っている。

同意を伝えると、(三階の)B&B入り口に設えてあるボードに、ピンで留められていたバス時刻表を取り外し——— 朝一番は、8時半発で——— と教えてくれ、ついでに市街平面図でバスターミナルの場所もマークしてくれた。朝食は間に合わないので断ると共に、宿の支払いも済ませておいた。

以上が昨日のいきさつで、余裕を見込んで8時ちょっと前に出発とするつもりであった。勘定その他は済んでいるものの、出来れば一声かけて旅立とうと、屋上テラスへ上がってみた。彼女は皿やカップをテーブルにセットしている。こちらの姿を認めると——— コーヒーぐらい飲んでも充分間に合うから——— と勧めてくれる。確かにバスターミナルまでは徒歩5分で、地元の間人ならば二杯ぐらいのコーヒーは飲めるだろう。しかし勝手に判らぬ異邦人にとって、半時間はそれほどの余裕ではない。鄭重に礼と別れの言葉を述べる。

昨日順路を下見してあるターミナルまでに問題はなかった。しかし乗車券を買おうとターミナルの一角にあるガードボックスのような売り場に行き **Catania** と書いたメモホルダーを示すと売り手のオヤジは東の方を指して何事か云う。居合わせた乗客(?)も、同じ方向を指して説明を試みる。どうやらその方角に違う会社のカタールニャ行き切符売り場か、ひょっとすれば乗り場があるらしい。

ともかくそちらへ行って見たものの、それらしいの見付からず、通りがかりの大学生風に尋ねると——— 私もカタールニャに行くところだが切符なら...——— と、やはり同じ方角を指す。それでもなお見付からず今度は子供を学校へ送って行く途上らしい若い母親に訊き、ようやく探し当てることが出来た。一昔前の、パチンコ景品買い所を思わせるような殺風景な窓口だった。

何とかカタールニャまでの切符11€(1,591円)を手に入れ、乗り場に戻ると8時15分になっていた。余すところ15分は大幅な余裕のように見えるけれど、実際の心理は違う。その程度の余裕があつて





カタール行きダブルデッカー。



高速道路A19号線。

始めてパニックに陥らずに済むのだ。

まもなくダブルデッカーのカタール行きバスが入ってきた。5分ほど待たされて乗車開始。10番目くらいで乗り込んだが、二階に上がると一番前はまだ空席だ。子供っぽいと見られても、見物と撮影に最適な位置は確保したい。落ち着いたのは前方右の角であった。

結局発車したのは8時40分になっていた。街を出てしばらくで(国道?)640号線に乗り入れる。高速道路ではないけれど、道路設備と見通しが良く、交通量が少ないので快適な走行が続く。勿論渋滞などとは無縁だ。9時半ころに高速道路A19号線に乗り入れ、ますます快調な走行となる。

途中9時50分ころに一回のトイレ休憩を挟んだだけで、180キロを2時間で走破し、10時40分にカタールの郊外の空港バスターミナルに到着した。此处で多少の乗降があり、以後はさすがに渋滞気味の道路に行く。

### カタール

カタールはシチリア第二の都市で、街の規模も大きく、適度な(?)渋滞で車上から街の様子を概観できたのは好都合であった。ダブルデッカーの最前席もこれを支援してくれる。港が見え、まもなく煉瓦積みの高架鉄道をくぐり、線路沿いに数百メートル行くと、(後で判ったことだが)カタール中央駅。駅前広場をターンするように周り、その後二回ほど右左折してカタール・バスターミナルに到着した。時刻は11時10分。

辺りを見回しても、バスの駐車スペース以外の、待合室やインフォメーションといったものは見当たらない。他に良い知恵も浮かばず、ともかく駅へ行くことにした。ところが情けないことに、たった二回の右左折で方角を失っている。100メートルほど歩いて、おかしいと気づき、通りがかりのオヤジに尋ねると、駅は正反対の方角であった。

間違えたダメージは幸いほとんどなく、そして駅舎に辿り着けば **Information** の表示もあり、順調に観光案内所を利用することが出来た。手持ちぶさたそうにしていた窓口のオバサンは、流暢な英語でそつのない対応だ。



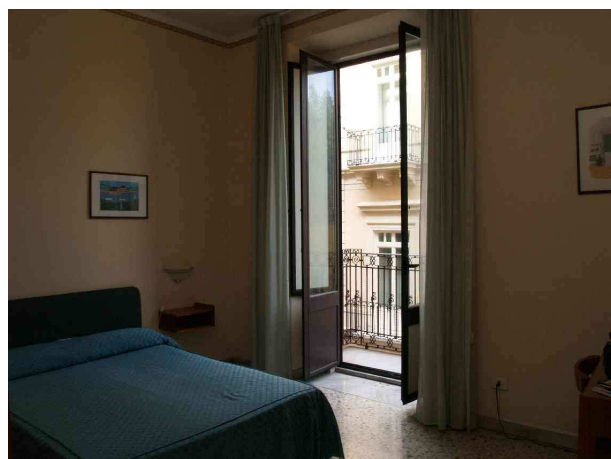
パターン化している、市街平面図とホテルリストの入手、スーパーマーケットとインターネットカフェの位置問い合わせなどを済ませ、ついでに旧市街中心部のお勧め宿を訊いてみた。等級に関して何も云わずにいると、彼女が手早くマークしてくれたのはいずれも二つ星のB&Bだ。

礼を云って観光案内所を出ると、待合室を探した。ベンチに腰を下ろし、老眼鏡を取り出してじっくりホテルリストを見直す。彼女の推薦は価格帯が20€(2,894円)~35€(5,064円)で、ホテル関係の料金は高いと印象づけられているシチリアで、安価に偏りすぎているような気がしたためだ。無視するのではなく保留、まだ11時半なのだから。

三つ星ホテルの中から、旧市街の中心部に位置し、比較的安価ものを探し出し、このホテルモデルノを暫定目標として歩き出す。途中で気に入った宿が見付かれば変更するもよし、モデルノが芳しくなければ観光案内所推薦宿を利用する手もある。

先程バスで通った線路沿いの道を10分ほど戻り、アントニーノ・ディ・サンジュリアーノ通りに入る。カタリーニャの背骨とでも云えそうなこの道路は、交通量が多く、あまり洒落た店はない殺風景な通りだ。幅が狭く歩きにくい歩道を、これも10分ほど辿り左折。大学広場(Piazza Università)やその先にドゥオーモ広場のある、旧市街の中核とも云えるこの界隈に、(路地裏ではあるが)モデルノは立地する。

ようやく尋ね当てたモデルノは、フロントに年配の顎髭を生やしたオヤジが一人いるだけで、ひっそりと静まりかえり、時流から取り残されたような陰気なところであった。しかし部屋は天井も高く広々し、清潔さや設備の点では申し分ない。一泊朝食付き55€(7,957円)で、二泊逗留することにした。



モデルノの部屋。

### Trattoria Il mare (大衆食堂 海)

部屋で荷物をざっと整理し、トイレを使ったり、部屋の写真を撮影などして、心身を「移動」の緊張モードから「滞在」の寛ぎモードに切り替えた。切り替わってみると、空腹感が頭をもたげる。街歩きの装備一式を身に着け、下へ降りた。

フロントは交替していて、同じような年配のオヤジだが、丸顔小太りで、先程の彼が達者に英語を話したのに対し、カタコトしか話さない。それでも何とか「シチリア郷土料理のお勧めレストラン」を、聞き出すことができた。宿のカードに書いてくれた名前はアンティカ・シチリアと、期待を持たせるようなものだった。

所在の市街平面図へのマークを頼むと ——— そんなことをしなくても、此処を出てすぐの角を右折し、まっすぐ行った突き当たりで、せいぜい2、3分で行くことが出来る ——— とのことだ。確かにこの言葉に偽りはなかったものの、肝心の店はシャッターを下ろしたままだった。

時刻が早過ぎるのか、定休日なのか、廃業したのか、期待が大きかった分、すぐ諦める気にならない。状況を一枚撮影し宿へ戻った。



Antica Sicilia。



大衆食堂 Il Mare の店内と定食、海の幸コース。

フロントには先程の二人が揃って居た。カメラの液晶モニターに閉店状況を表示し、丸顔に事態の説明を求めると、脇から覗いた髭がカラカラ笑いながら、定休日であると教えてくれた。話は振り出しに戻り、お勧めレストランの質問。結局海鮮料理限定ではあるがトレットリア・イル・マーレ (Trettoria Il Mare) ならば間違いないということになった。

—— 時刻が早過ぎるのも拙い —— との反省もあり、大学広場などを見物し、多少なりとも時間調整したつもりであったが、店に着いてみれば12時45分、ドアは開いていたものの開店前らしい。しかし気の良さそうなウェーターは、そのまま席に着くことに応じてくれた。こちらにしてもメニューとの格闘に時間が掛かるだけに好都合だ。

開店準備に忙しい彼の姿を視野の隅に置きながら、電子辞書を利用しつつ注文を検討する。伊日辞書以外にも、世界の料理・メニュー辞典の「イタリアの料理」が有益な情報に富んでいる。しかしこれらの支援があってもなお、実際に「この一品」は容易に決まらず、結局は「本日のお奨め定食: 海の幸コース」を、内容は把握できないまま注文した。

酒はハウスワインの白をデカンタで頼む。イタリア(少なくともシチリア)ではサイズ(量)の指定にグランデとピッコロがあり、

前者は1ℓ、後者は0.5ℓだ。このピッコロは、一壺では多いしハーフボトルでは物足りないときに有り難い。この時もピッコロで注文したのだが、海に幸に釣られて結局はもう一度追加したのであった。

定食を選んだのは大当たりで、バラエティーに富み、それぞれが美味な九皿を堪能した。難点を挙げれば(店側の落ち度ではなく)、どこまで続くのかも、どれだけの量で供されるのかも判らず、満腹のため途中で食べられなくなることを危惧しながら、控えめに食さざるを得なかったことか。イタリア語さえできれば難く解決できたのに。

いっそコースでなく、全部一度に並べてくれれば、前記のような問題はなくなり、ほとんど日本の宴席料理になるのだけれど。一方コースの良いところは、やはり熱いものは熱々状態が旨く、このセオリーを守れることだ。ともかく満足の昼食をカプチーノで締めくくり、勘定は席料2€(289円)、海の幸コース10€(1,447円)、白ワイン1ℓ7€(1,013円)、カプチーノ1.5€(217円)であった。支払いはカードで済ませ、2€(289円)をチップとしてテーブルに残す。

一眠りした後、爽快な気分で行ったのは4時だった。大学広場からドウオーモ広場へと散策する。



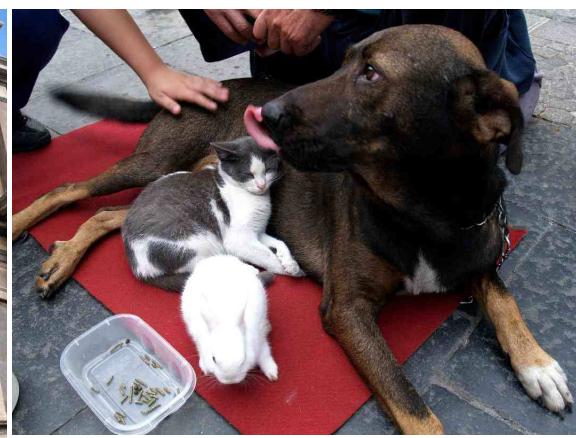
ドウオーモ広場。左奥がサンジュリアーノ宮殿、右ドウオーモ。

まずドゥオーモの前まで辿り着いたものの、丁度団体客が到着したところであった。日本人団体と異なり(何をしゃべっているか良く判らないので)それほどうるさくも感じないが、わざわざ競合することもないと広場を一周しながら、片隅に設えてある噴水などを見物する。改めて訪れたドゥオーモの内部は、改修工事中で落ち着かないものであった。

ドゥオーモからウゼダ門を出ると、市場通りになる。此処の主流は露店で、商売時間は既に終わっているため、屋台はたたまれ、辺りは洗い清められていた。

この通りに沿って高架鉄道が敷設されている。線路をくぐると公園で、その先は港だ。しかし海面が見えるところまでは辿り着けず、途中から東へ向かい、先程長距離バスで通過した道路に出た。この辺りにもバスターミナルがあるけれど、近郊向けのものらしい。

再び右折して北へ向かうと、旧市街に戻る。あれこれ道草を食いながら、一回りするのに一時間弱であった。大学広場には先程見掛けなかった物乞い老人がいる。彼の売り物(?)は、飼っている犬と猫と兎で、なぜかこの三匹が仲睦まじくやっているのを見ると、気持ちが和む。



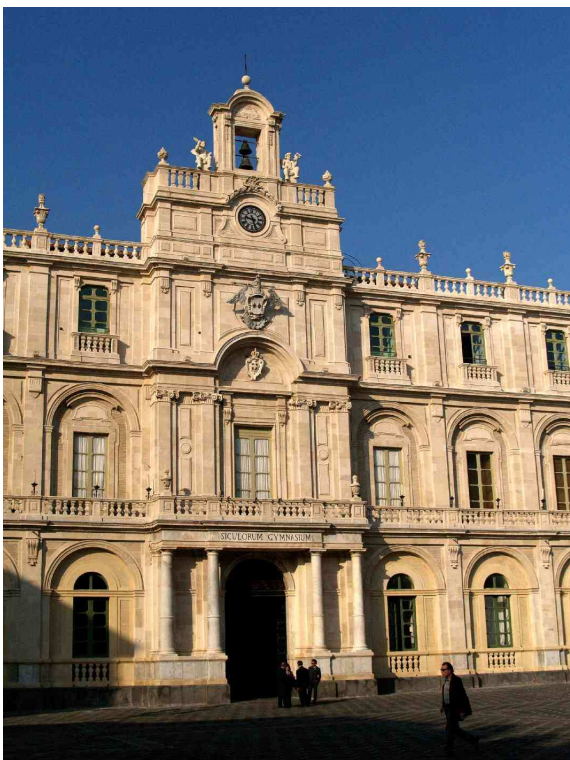
左上:ドゥオーモのファサードに飾られた街の守護聖女アガタ像。左下:アントニーノ・ディ・サンジュリアーノ通りを行く騎馬警官。右下:ドゥオーモ広場の片隅にある噴水。

1€(145円)出して撮影許可を求めると、ニヤリと笑ってうなずいてくれた。通りがかりの幼児が近付いて犬を撫でたりする。和やかな気分になるのは、多くの人に共通するらしい。

この日の街歩きは終わりにし、インターネットカフェに寄る。半時間1.5€(217円)。帰途カフェでミネラルウォーター(炭酸入り)500cc 0.5€(72円)を購入。ジンをこれで割って飲むのが、ここ数日のお気に入りになっていた。

### カタリーニャの二日目

26日は、文字通り雲一つない快晴だった。朝食を終えた後、ぐずぐずと部屋で時を過ごし、街へ出たのは9時半近くになっていた。旧市街を適当に一周するつもりでまず南へ向かう。



大学。



左:市庁舎と象の噴水。右:ドゥオーモの後陣。

大学広場からドゥオーモ広場へと、通り慣れた気分さえする所を歩き、ドゥオーモの内部がひっそりしている状態にちょっと寄り道をした。後陣のステンドグラスが清々しい感じで浮かび上がっているのが印象に残る。

この日も再びウゼダ門から出て、生鮮食品市場へ向かった。ほとんど(多分全部)の店が営業しているものの、人通りはそれほど多くない、時刻は9時半であったが、もっと早くかあるいは遅くが最盛期になるのか。そう考えれば、昨日バスでこの近辺を通過した時は、雑踏が激しかったように思われる。

商われている品物を見て、つい買いたくなるのはいつものことだけれど、我慢する。とりわけ明日は移動日だ。殻付きのウニが売られているのには驚いた。シチリアの主婦は自分である殻を捌くのであろうか。

それにしても「地中海国家」と云えそうなスペインやギリシャを旅して、ウ



市場通り。右下:手前に並べられているのはウニ。

ニ料理や市場に並ぶウニを見たことがない。シチリアが特別なのか、単に見方が悪かっただけなのか。

線路をめぐり南へ行く。ウルシーノ城塞を見物するため、「芸術と歴史の島 シチリア」に掲載のライトアップされた写真が、なにやら迫力ありげだったからだ。しかし実物は規模として大したものではなく、広場に駐車する車の中に埋もれてさっぱりだ。適当なアングルを求めて一周してみても収穫はなかった。13世紀前半に海賊対策として築造された由だが、現在では海岸線から数百メートルも離れている。

ウルシーノ城塞から聖女キアーラ修道院の横を通り北へ向かう。なるべく細い路地を拾いながら行くけれど、どこを歩いても車に悩まさ



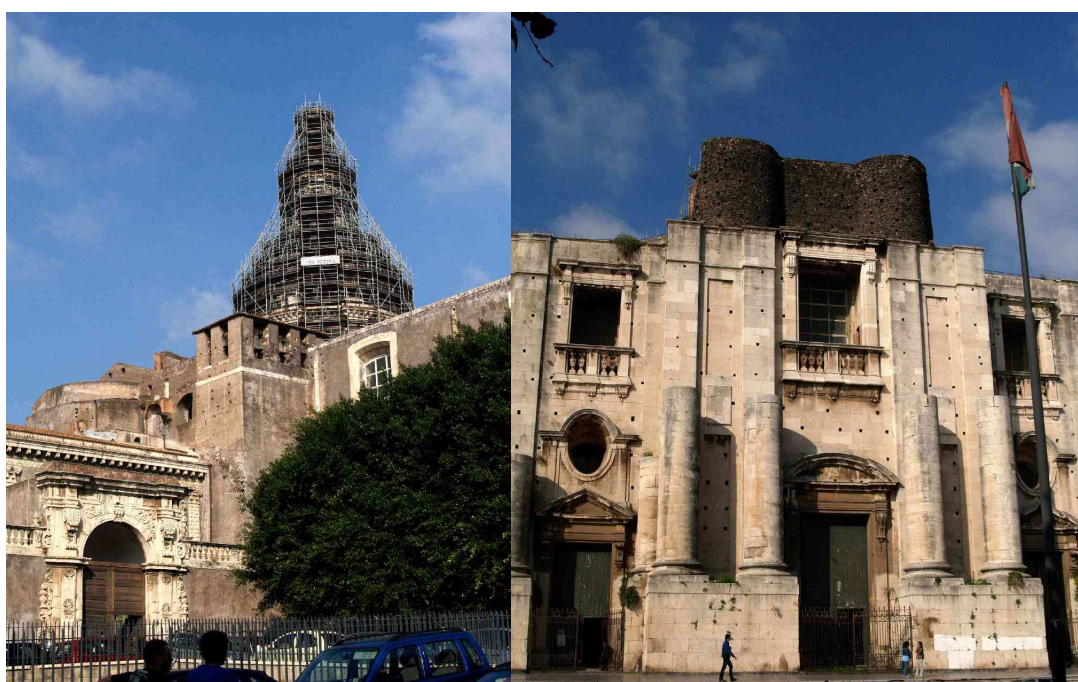
ウルシーノ城塞。



聖女キアーラ修道院。

れる。どうやらこの街は、「旧市街＝不便でも車をなるべく閉め出す」ヨーロッパ型ではなく、日本の街に似ているようだ。

一応南へ向かいながら目指していたのは聖ニコロ教会だ。動機はお粗末なもので、市



聖ニコロ教会のキューポラとその風変わりなファサード。

街平面図から読み取れる教会の規模が、カテドラルを上回っていたためだ。壮大な伽藍があるかと夢想していた。しかしウルシーノ城塞から20分ほどで辿り着いたところには、大規模な建造物こそあったものの期待とはかけ離れたものであった。

まず教会に隣接する、聖ニコロ修道院だが、古めかしいアーチの大玄関から出入りする人は多い。しかし彼(女)等から受ける印象は、信徒や観光客とは思えないもので、その人波に乗って入場できる気分になれなかった。そして教会の方は、確かに大伽藍ではあったものの、キューポラは補修工事用の足場で覆われている。それでも内部に望みを繋ぎ、正面玄関を入った。

確かに高い天井を支える大アーチと太い柱は存在した。しかしそれ以外は、主祭壇もなければ信徒席も見当たらず、その他、小礼拝堂、壁画、オルガン、懺悔聴聞室など、何一つない。教会をそれらしく見せるものがまるでない大空間は、会期を終了した見本市会場ならかくやと思わせるようなものである。呆気にとられつつも、未練がましく中をさまよってみたが、収穫は皆無であった。改修工事に先立ち、内部を空にしたところかもしれない。

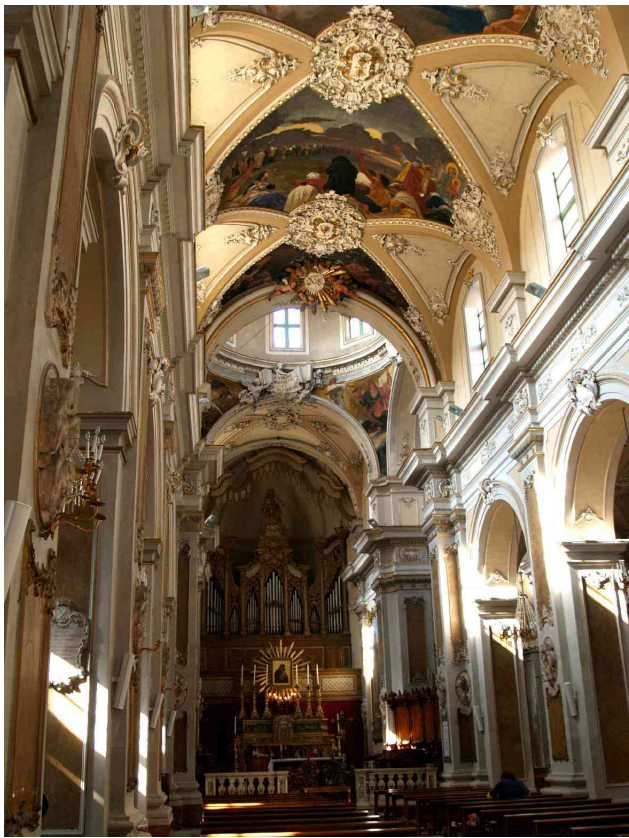
聖ニコロ教会から旧市街中心部方面へ漂う。途中カプチーノを飲んだり、目に留まった建物の方へ道草を食ったりしながら、11時ちょっと前にパチーニ通りに辿り着いた。長くはないけれど雑踏している通りを抜け、カルロ・アルベルト広場に出ると、見渡す限り露店が続いている。そのかず無慮数百か。

露店と云うことで、パレルモのバラロー市場に雰囲気似ているものの、違いに注目すると、魚介類より肉類が多く、衣料品や雑貨を扱う店が生鮮食料品店の数倍あることか。肉屋では精肉以外に内臓肉が大量にある。日本の一般市場では見掛けない光景で、部位も想像さえつきかねるようなものが多い。そもそも豚なのか羊かも判らなかつた。

変わったところではニンジンの専門店がある。ニンジンだけを数種類、屋台一杯に拵げ値段は1キロ1€(145円)ぐらいだ。イタリア料理ですぐ連想される野菜はトマトだけれど、このような専門店の存在は、ニンジンの使用量もただならぬものであることを思わせる。内臓肉にしても、いわゆるイタリアン素材として認知されていないから、あるいはシチリア料理が特異なのかもしれない。



カルロ・アルベルト広場の露店。



カルミネ(駆け込み寺)教会内部。

パチーニ通の突き当たりにあるカルミネ教会は、出入りする人波が絶えず、その七、八割方は信者のように見受けられた。覗いてみた内部は、主祭壇の後ろにパイプオルガンを配したもので、広大な空間を保持しながらも装飾は比較的簡素だ。歴史的に新しいものかもしれない。一巡しただけの短時間で退去する。

ちなみに市街平面図(英文)に、この教会は **Carmine Sanctuary** と記載されている。あまたある他の教会は全て **church** なのに。この点が気になり調べたところ、大別して八つある **Sanctuary** の語意の一つに「昔、不逮捕の特権を付与されていた教会(その他の神聖な場所)」があると判った。砕いて云えば「駆け込み寺」か。それならば街に一つだけというのも納得できる話だ。

露店市場を南へ抜け、幅の広いコルソ・シチリア通りを歩行者信号で渡るとスーパーマーケットがあった。酒が切れていたのが幸便に思う。アブソリュート・ウォッカ1ℓ¥10.8€(1,563円)と、オレンジジュース1ℓ¥1.2€(174円)を調達。荷物も重くなったので一旦宿へ戻る。

## Trattoria Il mare (2)

取り敢えず見物したいところもなくなり、部屋で読書などに一時間を費やし、1時ちょっと前に昨日と同じレストランへ出掛ける。若干早過ぎることは承知だけれど、昨日の印象から受け入れられることが判り、それならば混雑する時間帯を避けた方が気分的に余裕が出る。まだウェイター一人だけの店に入り、同じ窓際のテーブルに着いた。

今回はメニューで悩むこともなかった。昨日、隣のテーブルに供されているのを見て、食指の動いたイカスミスパゲッティと、今し方、店の入り口に置かれたショーケースを覗いて目星を付けた生牡蠣だ。これに白ワインをデカンタのピッコロで注文する。間もなくワインと一緒に到着したのはトーストの上に、刻んだトマトをオリーブオイルのドレッシングで和えたカナッペ風のお通し(?)だった。

オードブルとしてアンティパストなど注文すると、それだけで満腹しかねない量となるだけに、このようなお通しは有り難かった。

続いて登場した牡蠣四個は特筆すべきこともなく、レモ



お通し(?)とイカスミスパゲッティ。

ン酢を絞って食べる。そしてメインと  
考えていたイカスミスパゲッティ。イ  
カスミ独特の濃厚な風味がパスタに  
絡み合っ、旨い。スペインのアロ  
ーゾ・ネグロ(イカスミのパエリア)を  
思い出す。あれも好物ではあるが、  
やはり米とスパゲッティではだいぶ  
違いがあるし、さらに振りかけたパ  
ルミジャーノチーズがその差を大き  
くしているようだ。

豊かな気分で昼食を終える。勘  
定は、席料2€(289円)、牡蠣四個  
4.8€(694円)、イカスミスパゲッティ8€(1,157円)、白ワイン500cc3.5€(506円)、カプチーノ  
1.5€(217円)。

いつも通り早々就寝する。しかし夜も更けて、街から響いてくる音で目を覚ました(あるいは目を  
覚ましたら、音が聞こえてきたのか)。繁華街の騒音とは異なり、パレードなどを彷彿させるようなも  
のだ。

一瞬、何事が起きているのか確かめたい気になる。晩秋とはいえ外は暖かく、冷え切った夜の街  
に出る厳しさはない。しかしベッドの中でグズグズと実行への各段階を考える。衣類をまとい、装備  
一式を着け、夜更けの路地を音だけを頼りに探し行く。そこまでやってもセレモニーは今すでに終  
局を迎えているかもしれないと思い付いたとき、事態確認への情熱は冷め切ってしまった。

終了の可能性とは裏腹に、街から流れてくる音は、次第に接近してくる。11時半になり、到頭好  
奇心を抑えきれず、最低限の衣類を身に着け、素足で靴を履いてバルコニーへ出た。驚いたこと  
に、昼間は行き交う人もあまりない通りが、人波で埋まっている。



街を歩いていて目に留まったもの：左上：風防、屋根からシートベルトまでついている。日本では、未発売らしい。右上：飲み屋の看板。力作ではあるが好みではない。この飲み屋  
に入りたいとも思えない。左下：日本アニメーションのステッカー。進出ぶりがうかがえる。  
右下：公衆電話の設置台数は多い。

そして良く判らない  
のが人々の動きだ。一  
定方向へ流れることも  
なく、だからといって何  
かを待っているわけ  
でもない、縁日の群衆に  
似て、上り方向、下り方  
向、立ち止まり、がほぼ  
同数と云った感じだ。  
しかし縁日と全く異なる  
のは、見て回る露店も  
見せ物もないことだ。



サン・ベネデット通りを埋め尽くす群衆。0時21分。

一向に変化を生じないガヤガヤを見下ろすことにも倦み、三枚ほど写真を撮って引っ込んだ。かしざわめきは静まる様子もなく、それどころか心なし増して行く。0時20分になり、正体不明の雑踏が続くことに堪りかね、もう一度バルコニーから覗いてみても、顕著な変化は観察できなかった。虚しくベッドに戻り、浅い眠りに引き込まれる。潮騒が引いて行くように辺りが静まったのは1時を過ぎていただろうか。

### シラクサの観光案内所

10月27日、7時前に目を覚まし、バルコニーから街路を見下ろす。清掃人が一人、昨夜の群衆が残した空き缶やペットボトルを拾い集めていた。今にも降り出しそうな空模様だ。

7時40分にチェックアウトし、8時10分にはシラクサまで87キロの切符を5.13€(742円)で購入。8時43分の列車を利用する予定であったから、悠然と周囲を観察しながらプラットフォームへ向かう。一番線には列車が入線していた。

電光掲示板の表示からするとシラクサ行きらしい。運行ダイヤの乱れにより、本来ならば疾うに発車していたのが待機中か。このような場合、予定にこだわらず利用できる最早を選択することになっている。しかし拙速に行動して行き先を違えては馬鹿々々しいので、乗車して付近の人に切符を見せて確認を試みる。ところが反応は曖昧なもので、仕方なくもう一度降車し、ホームにいた乗務員に糺してようやく自信を持って乗り込んだ。ほとんど間をおかず発車する。

一時間半ほどの乗車で、海沿いを走る区間が多かったのに、曇天のせいもあり車窓風景はさっぱりであった。それでもデジタルカメラの撮影コスト安もあり、こまめにシャッターを切っていると、アウグスタの手前で、向かいに坐っていた若いビジネスマン風 —— この先の右側に絶好の撮影ポイントがある —— と教えてくれた。

せっかくだから席を立って通路へ行き、六枚ほど撮影したものの、大した風景ではない。彼も勧めた責任上か、脇に立って眺めていたが —— 天気さえ良ければ素晴らしいのに、今日は...



野良犬達。シチリアは彼等に寛容らしく、方々で数多くの野良犬を見掛けた。



車内。窓の上に貼られたステッカーは、窓からの降車を禁じたものだろうか。三十数年前、混雑した列車でそんな降り方をしたことがある。しかし現在の日本では考えられない。右はコンパートメント。二等車にもかわらず快適であった。





——と繰り返し悔しがっていた。その男もアウグスタで降車する。

10時に到着したシラークサから受けた第一印象は —— 侘びしいところ —— であった。小雨がそぼ降り、アスファルト舗装が陥没し水溜まりになっているところを、水しぶきを跳ね上げながら車が通過して行くのが、その印象に拍車を掛ける。

駅前にその印象に見合ったような二つ星ホテルがある。安宿を忌避するつもりはないが、まだ10時なのに、気に入ったわけでもないところへ投宿するつもりになれない。その50メートルほど先にも二つ星ホテル。ともかく観光案内所を見付けてホテルリストを入手しようと、通りがかりのアフリカーンス系ビジネスマン風に尋ねる。このまま真っ直ぐ行けば良いの答えに、北北東へ進む(以下、方位を使用して記述するが、あくまでも便宜のためで、この時点では文字通り「西も東も判らない」状態であった)。

200メートルほど行って、左の方が繁華街らしいので西北西に転進する。間もなく広場にぶつかり、男女併せて十人ほどの警官がいた。親切な人達であったが誰も英語を話さない。(30%程度の確信で)理解できたのは、西南西に行って、信号二つ目を左折すると劇場があり、その近辺らしい。

進むにつれて道の両側に商店が増え、いかにもメインストリートらしくなったものの、信号は一つもない。もともと「信号二つ」に自信はないから、店頭で暇そうに佇んでいたオヤジに尋ねる。西南西は良いらしいけれど、—— コンピュータ学校の所を右折 —— らしい。

信号も学校にも行き着かず、商店のオバサンと客らしいのが立ち話しているのに再質問。今度は東北東といわれる。正反対の教えに迷ったものの、警官とオヤジの二票(?)入っている方を採択し、同じ針路を保持した。間もなく最初の信号に出会ったものの、劇場は見当たらない。

パトロール中の婦人警官を見付けて、もう一度尋ねる。—— すぐその... —— といった反応があると信じていたが、彼女は東北東を指して、険しい顔で街路の名前を早口で告げる。ゆっくりしゃべってくれても、まず聞き取り不可能なので、メモホルダーとボールペンを差し出して書いて貰った。Maestranza。

これだけ自信満々かつ明快に示されては、西南西路線は放棄せざるを得ない。しかしMaestranza 通りが東北東の近くか遠くかも皆目わからないし、何とか街頭の市街平面図でも探し出して調べたい。そう思って200メートルほどのところに、市街平面図を見つけたときは、一瞬救われた気分になる。しかしちらつく目でアルファベットの表示を読み取ってゆく作業を数分続け、罅が明



観光案内所を探す途上で見掛けた、エスカルゴの路上販売。

かないことをはっきりした。そしてこの平面図には案内所を示すiマークもまるでないのだ。

トラパーニでも再三尋ねてようやく辿り着くことができたが、あの時は目標へ確実に収斂して行く感触があった。今回は逆に拡散してゆくばかりだ。絶望的な気分で見回すとジョリイ・ホテルの看板が目に入った。

一瞬迷う。このホテルはチェーンで四つ星クラスのはずだ。しかし多少料金が高かろうとも、小雨降る街を徒に右往左往して時間と体力を消耗するよりましだろう。ともかく料金を訊いて、部屋を確かめてから宿泊するかを決めることはできる。

フロントにいたマネージャーは、陽気そうな中年男で、料金110€を告げたが、すぐに朝食と昼食または夕食付きで92€に値下げし、舌の根が乾かぬうちに —— 朝食のみ、テラスもバルコニーもなしで80€ —— と、たたみかけるように提示する。

一方的な攻勢にたじたとになりながらも、まずは部屋を見せて貰うことにした。その間を利用して方針の見直しなど、態勢を立て直すこともできるだろう。

提示された部屋は広くこそないものの快適で、四つ星だから設備などは申し分ない。しかし窓から外を見ると眼下を車が往来している。この騒音が気になり、フロントへ戻って、裏手の部屋がないか訊いた。 —— シャワーだけでバスStubのない部屋しか. . . —— を了承して、再度下見をする。角地に立地するこのホテルには、「完全な裏手」はないと判ったものの、これ以上何か注文を付けるのは —— 難癖を付けている —— ように思われて、妥協することにした。

チェックインを済ませ部屋に荷物を収めると、街へ出た。フロントで市街平面図を貰い、観光案内所をマークして貰う。メインストリートを西南西に行き、右折したところだった。ちなみにこの街の観光案内所に関して最終的に判ったのは以下のようなことだ。

全部で三つあり、一つはオルティージア島の中(アフリカーンス系ビジネスマン、商店のオバサン、婦人警官が示唆したのはこれ)、二つめは地図にマークされたもの(店頭オヤジの指示)、そして三つ目は考古学地区の中(警官の指示)にあり、「劇場」とはギリシャ劇場遺跡のことであった。それについても思うのは —— 観光案内所を指す道標が欲しい —— ことで、スペインなどはかなり多く、シチリアでも街によってはちらほら見掛ける。しかしシラクサ市街ではついに発見できなかった。

閑話休題。案内所で別種の市街平面図、その他観光情報入手し、レストランと見所が多いというオルティージアの島へ向かった。

小雨が断続的に降り続けている。本屋を見付けて道路地図5.1€(738円)を購入した。ガイドブックなしを「芸術と歴史の島 シチリア」情報で代替できるようになっていたが、地図が弱点として残っていた。トーマスクックの路線図ではあまりにお粗末だ。シチリア全島をカバーした25万分の一図は使いやすく重宝した。



本島(左側)とオルティージア島を隔てる水道。

途中で面白いものがあれば寄り道するつもりでいたのに、(天候のせいもあるが)寒々とした感じの街路を、ほぼ直行してオルティージア島に渡る。シラクサに着いてから歩いた、侘びしい感じの駅前や、一般都市の繁華街そのもののメインストリートと印象が一変する。

古い街並みのそこ此処に、レストラン、カフェ、バルなどが軒を並べるように多数あり、いかにも観光地だ。しかしシーズンオフで天気の良くない平日と云った条件では、辺りを歩く観光客が疎らなことは仕方ない。時刻も12時半と早かったので、島見物をしながらゆっくり昼食場所を選ぼうと思っていたが、四軒目で路地裏に多少なりとも雰囲気の良いさそうなレストランを見付けると、吸い込まれるように入ってしまった。

「オーナー」と呼ぶより「食堂のオヤジ」が似合う中年男と、息子らしいウェ이터がいるだけであったが、愛想の良い笑みで迎えてくれる。メジャーな観光地のレストランらしく、英文のメニューも用意されていた。しかし昨昼に続き今回も迷わない。

入るとき見掛けたビュッフェ形式のアンティパステイは、シチリアの第一夜にその存在を知り、機会があれば試したいと思っていた。そして二日目の昼に食べ損なったスパゲッティ・ポモドーロ。

以上の二品に赤ワインをボトルで注文すると、勇躍アンティパステイの並ぶテーブルへ行く。あれこれ目移りし、分量も多くなりがちなのを自制し、選び取ったのは、茄子、ズッキーニをスライスしてオリーブ油で焼いたもの、イワシや小エビのマリネ、ペペローニ(赤ピーマン)、セッコ・ポモドーロ(乾燥トマト)のサラダ、塩漬けオリーブの実、その他正体不明ながらも食指が動いた数品。

席へ戻って赤ワインと共に食する。とりわけ美味と思うものはないけれど、酒のツマミとしては好適なものばかりであった。ワインもアンティパステイも半分くらい片付いたところでスパゲッティ・ポモドーロが到着した。食べかけの皿を下げぬよう頼み、スパゲッティにも手を出す。

スパゲッティ・ポモドーロは旅の直前に購入し、今も持ち歩いているイタリア料理紹介本に載っていた。「材料を合わせ、そのまま20分煮るだけのソースは、シンプルでいて素直に美味しい」とリードの付いたレシピを見れば、トマト以外はニンニク、バジル、オリーブ油のみ。そしてこのソースを掛

けただけなのがスパゲッティ・ポモドーロだ。

日本の食に例えれば、掛け蕎麦あるいは釜揚げうどんと云ったところか。出汁とか醤油を使わないからさらにシンプルかもしれない。それにも関わらぬ、あるいは、それ故の美味。豪華ではないがパスタとトマトをとことん味わい尽くす、飽きのこない庶民の日常食なのであろうか。



レストラン・ジオーベ。右上:ビュッフェ形式のアンティパステイから選び取った。左下:スパゲッティ・ポモドーロ。歓声を上げた婦人の皿。

新たに現れる客もなく、独占状態で昼飯昼酒をのんびり楽しんだ。表が小雨模様であることも、かえって室内の寛ぎを際立たせてくれる。食事も終盤に近付いたころ、六十代のカップルが訪れた。観光客らしいがイタリア人と見受けた。

注文を済ませたあと、うるさくはないけれど陽気な会話が、席の離れたこちらまで聞こえてくる。そのうち料理が運ばれてくると、婦人が *Mamma mia!* の歓声を上げた。どうやらその一皿が豪華だとか盛りが良いと云ったことらしい。ともかくその天真爛漫な響きに、対象を調べたくなかった。今後ターゲットにすべきメニューか？明日またこの店に来て注文すべき皿か？

店に他の客がいなかったことも好都合であったし、ワインほぼ一壇の酔いも加勢してくれた。カメラを携えテーブルに近付き、英語を話すことを確かめ、改めて撮影許可を求める。*Mamma mia!* の声に触発されたことなど述べ、逆にどこから来たか訊かれた。答えると —— 東京は一度行ったことがある。息子が赤坂に住んでいる(た?) —— そうだ。

食事の最後は相変わらずカプチーノ。勘定は、席料2€(289円)、アンティパスティ10.8€(1,563円)、スパゲッティ・ポモドーロ3€(434円)、ワイン一壇16€(2,315円)、カプチーノ1.5€(217円)であった。

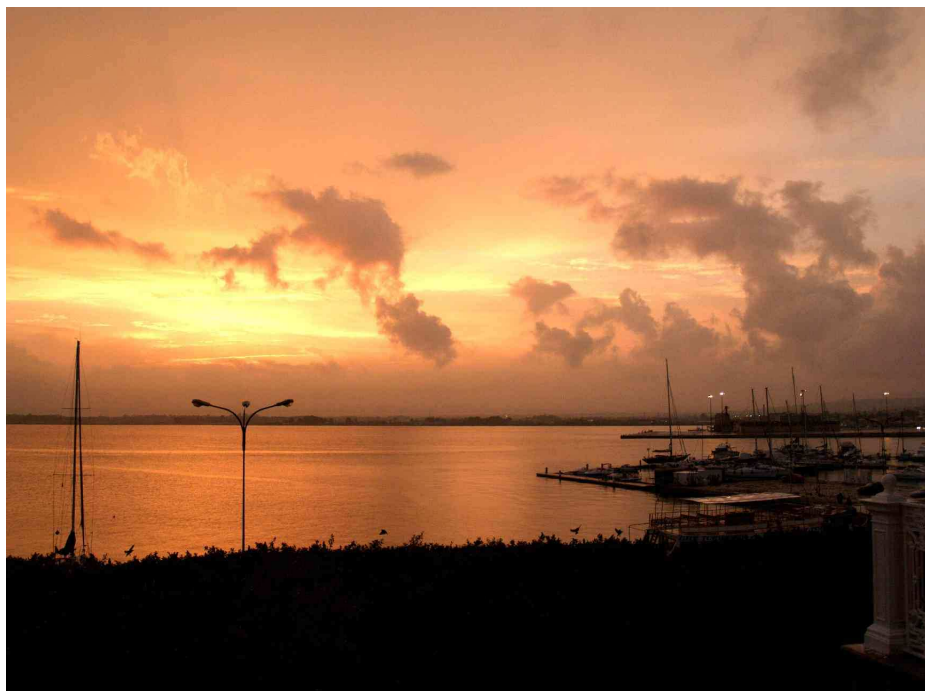
店を出ても小雨もよいは続いている。明日もこの街に逗留するつもりなので、先を急いで見物する気にもならない。部屋に戻って四つ星ホテルの快適さを楽しみ、昼寝その他で時を過ごした。ようやく雨の上がった街に、再び出掛けたのは5時を廻っていた。

オルティージア島へ直行し、島の北側から時計回りに島を一周する。家並みは古びて趣があり、車の往来がほとんどない石畳の径を辿って行くのは、散歩コースとしては申し分ないものだが、記録に残す景観と欲張れば物足りない。

とぼとぼ歩いて半時間、島の突端を過ぎ、南側に回り込むと、西の空が夕焼けに輝くのが見えた。短かいあいだに雲が吹き払われ、晴れ間が広がって行くのが見える。明日の好天を約束するように。

島からの帰り道、インターネットカフェに立ち寄った。観光案内所で地図にマークして貰った所だ。簡単に見付かり、PC も使用できたけれど、漢字が化けてしまう。係の女の子は、親切に他の機械をアレンジするなど努力はしてくれたが、フォントをインストールするようなスキルはなく、代替機も同じ症状だったので、メールチェックは諦めた。どうせろくな着信はないはずだ。

宿の並びにある総合スーパーマーケットでジン6.65€(962円)、ミルク1.18€(171円)、ミネラルウォーター(炭酸)500cc0.22€(32円)、ハム150g 1.94€(281円)、チーズ200g 1.32€(191円)、レジ袋0.03€(4円)。チェックイン時に憂慮した道路騒音も、大したことはなく熟睡する。



ポルト・グランデ(大湾)の夕焼け。

## 電池切れ

10月28日は気持ち良く晴れ上がった朝だった。9時になってオルティージア島へ向かう。昨日二回訪れているが、まだどこいって本格的に見物したところはない。今回は市街平面図を見ながら順に廻ってみる。

橋を渡ってすぐ突き当たるのがパンカリ広場。アポロ神殿遺跡が有名だけれど、覗いてみるとさっぱり面白味のないものであった。露店朝市が目に入り、そちらへ寄り道。しかし規模も小さく、並んでいる商品もとりわけ目を惹くようなものはなかった。シラクサそのものが比較的小さな街だし、さらに現在の市街中心部からは外れたこの辺りでは、「シラクサの朝市」とはいえないものか。

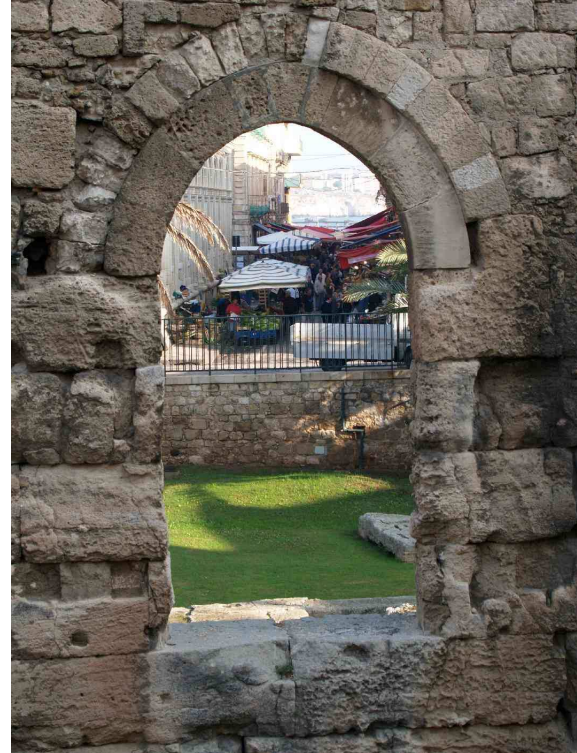
数枚写真を撮り、アポロ神殿の脇を抜ける緩い坂道を上る。幅

広の通りで、両側に建ち並ぶ商店は、心なしか新市街よりは洒落た店が多いようだ。狩猟の女神ディアナに捧げられた噴水が中心にあるアルキメデ広場に出た。

広い通りは此処で終わり、ローマ通りを抜けてカテドラルの横手に出た。此処もまた改修工事中らしく、建物の半分は足場に覆われている。「芸術と歴史の島 シチリア」に、ファサードの堂々たる写真が掲載されており、期待があっただけにいささかがっかりした。ともかく横手の入り口から内部へ。カターニャのカテドラルとは逆に、内部は改修工事の影響をまるで感じさせない静謐の保たれた状態だ。

装飾に過剰なところがなく、清楚な趣は好ましく思うが、それでも今まで見てきたカテドラル同様、日常的祈りの場ではない、表現を替えれば、人間臭さが希薄でどこかよそよそしい感じがする。別に信者ではないのだからどうでも良いことだが。

成り行き上、脇にある入り口を利用したけれど、時間に余裕もあり、一旦表へ出てドゥオーモ広場から(足場に隠れた)ファサードを見上げ、正面玄関から入り直したりする。20分ほどをカテドラルで過ごし、ドゥオーモ広場のカフェで一休み。



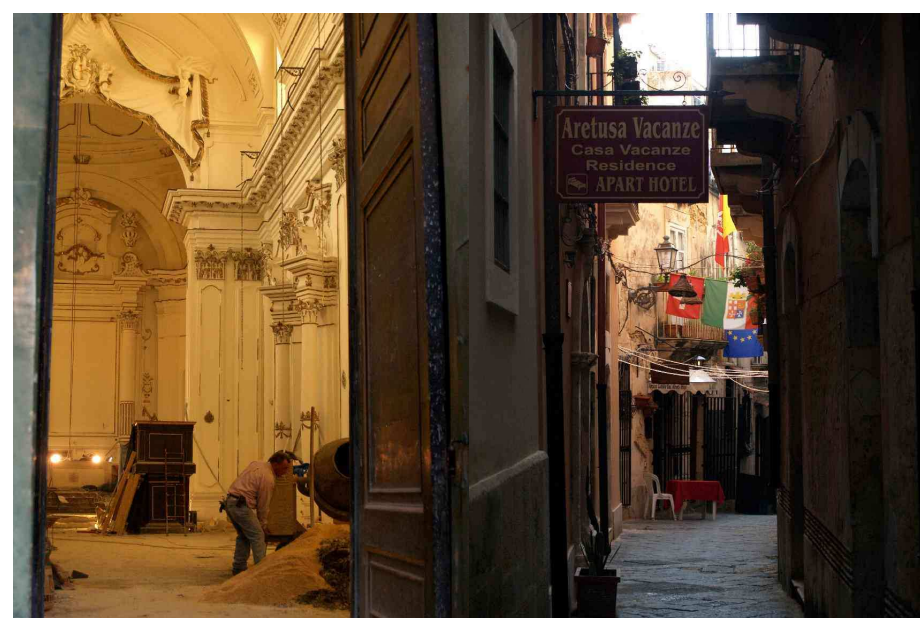
上:ベネディクティス通りの露店朝市。下:アポロ神殿遺跡と背後に露店朝市。



カテドラル内部。



ドゥオーモ広場のカフェ。



気温は25℃で日射しは強く、パラソルの作る日陰が快い。カプチーノ一杯を楽しみ、島の探訪を続行する。

広場の南端にある聖ルチア教会は、小振りではあるものの、趣味の良い佇まいだ。これに惹かれて内部を期待して近付いた。半開きのドアが不自然と思ったが、そばまで行ってみれば、修復工事のため数名の職人が作業中だった。

さらに南下する。サロモン通りは道幅も狭く、宿や食堂が多いが、その割に閉鎖的な雰囲気が漂う。多分バカンスなどで長期滞在する人を対象とし、下宿的あるいはその延長としての食堂なのであろう。実際 Apart Hotel の看板も見掛けた。

下宿街はすぐに終わり、マニアーチェ城にぶつかる。城と云っても砲台程度の小規模なものだ。昨日も別経路で此处まで到達していた



左上：修復工事中の聖ルチア教会。右上：サロモン通り。下：マニアーチェ城。

けれど、時刻が遅かったためか、すでに扉を閉ざしていたため今日の再訪となる。木製の門が八の字に開かれていた。

内側にもう一つ鉄格子のゲートがあり、近付くと右側にある小屋からオヤジが出てきて開門してくれた。この小屋で入場券を買うのかと思ったが、彼は身振りで前方にある城の方へ進めと指示する。大規模駐車場のような、殺風景で何もない平地を横切り、主として石造り二層の「城」部分へ入った。

さほど広くない所なので、順路と云った表示も必要なく、一通り見て回った。訪れる人も少なく、20分ばかりいたあいだに、出会ったのは三人だけであった。帰ろうとすると、先程のオヤジが —— 小屋に寄って行くよう —— 求める。中にはカウンターがあって二人ばかり女性が待機している。此处でようやく入場券、正確に云えば退場券(?)を2€(289円)で購入した。

城を後にしてアウトゥレーサの泉へ。海岸の岩窟にありながら、真水が湧き出る珍しさや、ニンフのアウトゥレーサが身を守るため泉に姿を変えた伝説などが売り物だけれど、ただ見る分には面白くない、単なる小さな池であった。

11時を廻ったので、インターネットカフェを探しに行く。観光案内所でマークして貰ったうちの一つはこの近くにあるはずだ。改めて地図を見直し、ドゥオーモ広場から北へ延びるカプール通りを辿った。



注意していたつもりだが、見逃した。もう一度、後戻りして見付かったそれは本屋の中で、レジの脇に四台ほどコンピュータが置かれた「インターネット・アクセスポイント」であった。メールチェック後、Trenitalia(イタリア鉄道)にアクセスし、シラクサからノートへの運行ダイヤを調べる。

半時間ほどでインターネットを終わり、時計を見ると12時にはちょっとある。昼飯

停泊していた観光船やクルーズ船。左下はカナダの芸術家集団が世界一周を目指して航行中の帆船。

には早いけれど、一旦宿へ戻って出直すほどでもない。グラン・ポルトに停泊している船を見物しながら散歩することにした。日和は海辺の散策に絶好だ。

ポルト・グランデのオルティージア島に設けられた埠頭に停泊しているのは、中型のヨットが多い。英国船籍の二隻は、制服を着た乗組員がいて、さしずめ大金持ちが友人知己と優雅に航海を楽しむ雰囲気だ。見物しながら5、6分のあいだに13枚ほど撮影したところでシャッターが下りなくなった。

カメラ後部のモニターに赤字で警告が出ているのを見て、電池切れと判る。一晩掛けてフル充電したはずなのに、六十数枚で切れたことに不満は感じるが、珍しいことではないから用意の予備電池と交換した。しかし警告は消えない。何らかの不手際で充電に失敗したらしい。

カメラが使用できない状態に耐えられないほどのカメラ中毒ではないけれど、かといって今晚まで撮影ができないと、紀行文作成には障害となる。宿へ戻って間に合わせの充電を開始した。他にすることもなく、ベッドに寝転がって「芸術と歴史の島 シチリア」で、これから訪れる地の選択などに時を過ごす。

半時間経ってフルではないにしても数時間分は充電できたものと、カメラの電池を交換した。しかし相変わらずの赤字警告に、遅ればせながら原因は他にあると気付いた。老眼鏡を掛け、始めて警告の内容を読む。電池に問題はなく、画像を保持するメモリーが満杯になっていた。

なぜ誤った思い込みで陥っていたか、話は多少長くなる。今回の旅で使用しているメモリーは「マイクロドライブ」で、一枚に約二百枚の画像が入る。一日の撮影枚数がこれを越えることは稀だけれ

ど、皆無とは云えない。そこで日常ローテーション用に予備を一枚。さらにマイクロドライブは故障する可能性が僅かながらあり、これに備えて非常用をもう一枚。合計三枚を持参している。

一日の終わりに、宿でその日撮影したものを集中管理用の媒体に移動し、メモリーは空になった状態で次の日を迎える。このサイクルを正常に続けているつもりであったのに、気付かぬあいだに以下の三つが発生していた。

1. 日常ローテーション用の一枚と非常時用が入れ替わっていた
2. 非常時用に移動したものに撮影済みデータが残っていた
3. この日、非常時用に移動したものが日常用に戻ってきた

以上のことから、この朝 —— 200枚撮れる —— と思っていたメモリーには、既に126枚の画像が半分以上の領域を占拠していた。

エラーが発生したときに、若い頃であればごく自然にその内容を読み取って、当たり前の対応をしていたはずだ。それが老眼鏡なしで不自由するようになり、つい眼鏡の手間を惜しんで思い込みに従ってしまった。歳と共に肉体が衰えることは致し方ないが、それを補う老練さが身に付かぬことを哀しく思う。しかし実害は軽微で、一時間ちょっとを無駄にただけだ。仕切り直して昼食へ出掛ける。

当初は昨日と同じレストランへ行くことを考えていた。しかし狭い路地の奥にあるあの店は、穴倉に潜り込んで行くような感じがあり、小雨もよいの時にこそぴったりであったが、今日は違和感を覚える。そんなことでクルーザーの停泊する埠頭からアウトウレーサの泉の横を通り、グラン・ポルトを見晴らす小高い海岸に出た。レストランが軒を並べている。少し奥まったところにある Lungolanotte Cafe に入った。

屋外席は半分近いテーブルに先客がいた。ちなみに薄暗い屋内は無人。ウェイトレスは —— お好きな席を. . . —— というので、湾を気持ち良く眺められるテーブルに着いた。観光地のレストランらしく、印刷されラミネートで保護された英文メニューが出てくる。

シチリアの二日目 (P.11) 以来、スパゲッティを追求してきたけれど、気分を変えてリゾートにしてみた。  
Risotto alla marirana.

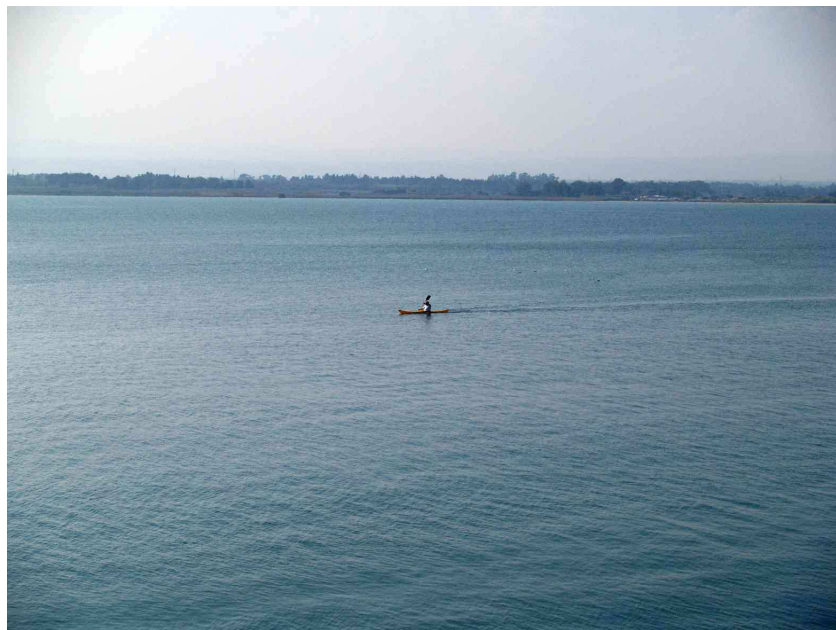


左上:小高い海岸線。右上:見下ろすと泳いでいる人がいた。撮影してから軽く手を挙げると、返礼があった。中左:日射しが強いので、日陰の席に集中する。左下:トマトサラダ。右下:海の幸リゾート。



これにトマトサラダと白ワインをボトルで頼む。まもなく到着したワインはほどよく冷え、汗ばむようなこの昼下がりに、とりわけ美味に感じられた。視線を上げると、波静かなグラン・ポルトを、一艘のカヌーが滑るように横断して行き、なんの音も聞こえないことが涼味を引き立ててくれる。

しかしそんな風にして5分も坐っていると、テーブルの選択を誤ったことに気付い



洋上をカヌーが滑るように横切って行った。

た。直射日光により、ジリジリ炙られたような気分になってきたのだ。(自分で選んだのに)身勝手をいって店に迷惑を掛けることは避けたかったけれど、堪え忍んで食事をするのも馬鹿げている。そして日陰席のテーブルも二、三空いている。店に招き入れてくれたウェイトレスに尋ねると、快諾してくれた。せめてもの申し訳に、ワイングラスは自ら持って移動する。

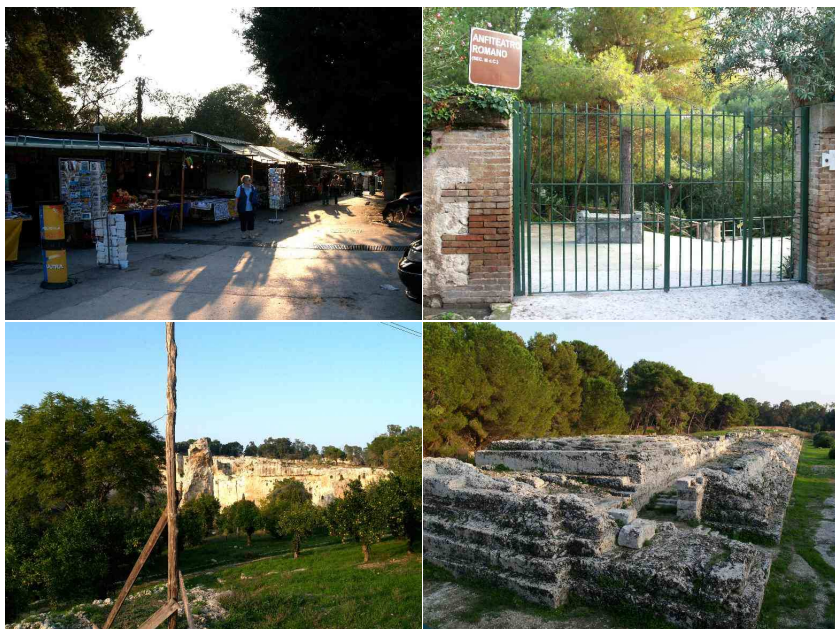
態勢を整えて食事に掛かる。トマトサラダはなんということはないけれど、イタリアのトマトが旨いように思われるのは気のせいだろうか。リゾットは注文を受けてから炊いたようだ。観光地のカフェでも、手抜きをしていないのが嬉しい。一時間ほどの昼食を堪能する。料金は、席料1€(145円)、ワイン一壺16€(2,315円)、トマトサラダ3€(434円)、リゾット8€(1,157円)。カードで支払い、コインで2€(289円)をチップに置く。

宿で一時間ほど昼寝をした後、再び外出したのは5時近くになっていた。目指すのは宿から10分ほどの所にある、ギリシャ、ローマ遺跡を中心とした考古学地区だ。相変わらず好天気が続いている。たった三十時間ほど前に、小雨降る中、観光案内所を探して行く先が収斂しないまま、滅入る気分を奮い立たせて歩いていたことが嘘のようだ。のんびりそぞろ歩きを楽しみ、信号二つ目を左折した。

土産物屋の屋台がずらりと並ぶ様は、いかにもメジャーな観光地と改めて納得する。しかし何か雰囲気の違いを感じ、良く見れば人通りも少なく、店は閉店準備に忙しい。事情はすぐに判った。遺跡の公開時間は5時までなのだ。今更どうなるわけでもないが他にすることもなく、ゲートの所まで行っ

て確かに閉まっていることを見届ける。

メモリーに関するトラブルの結論として「実害は軽微」と記したけれど、実は違っていたのかもしれない。あの一時間がずれていれば. . .。しかしそれほど遺跡が好きなのではなく、事態をそのまま受け止めて、公園となっている考古学地区を散歩する。柵の間から垣間見える遺跡を眺めたり、隣接して設けられている運動公園を横切ったりして半時間過ごした。



左上：軒を並べる土産物屋も閉店準備中。右上：ローマ円形闘技場入り口。左下：鉄格子柵の間から垣間見る遺跡地区。右下：ヒエロン二世の祭壇(B.C.3)



リースやドライフラワーの専門店。

まだ晩酌には早いような気がして、散策の足をオルティージア島の近くまで延ばした。帰途スーパーマーケットに寄って、ハム1.59€(230円)、ミネラルウォーター(炭酸)500cc0.22€(32円)、パン180g0.4€(58円)、アンチョビー140g/70g1.99€(288円)など。

部屋に戻ると、クリーニングを頼

んでおいたカッターシャツが届けてあった。料金は3.95€(571円)。ペラペラではあるもののボール紙の箱に入っていたことに驚き、さらに開けてみると微かながらも洗剤が匂いさらに吃驚する。確かにヨーロッパを旅していると、洗濯物からしたり落ちる水滴、あるいはすれ違った人のシャツが、匂うことは珍しくない。香水＝体臭には気を遣うらしいのに不可思議なことだ。

### 駅前ホテル

29日も晴天が続いていた。この日の目的地、ノートは半時間で行けるところなので、9時55分発の列車を利用する。早く着きすぎても、宿探しやチェックインに支障が出そうだから。

9時40分、駅に着いてノートまで33キロの切符2.75€(398円)を買う。乗車プラットフォームを訊くと —— ちょっと待て —— と身振りで示し、席を立てて横手のドアから一番線プラットフォームへ出てきた。西の方を指して —— 真っ直ぐ行くと、駅舎の陰になっている. . . —— と教えてくれる。日本ならば良く零番線などと表示される補助プラットフォームらしい。それにしても親切だ。待つ客がいないからできることとはいえ、感心する。

いかにもローカル線といった風情が滲む、二両編成の列車が入線していた。車内は既に七割方席が埋まっている。しかし次の駅で高校生風が大勢下車し、がら空き状態になった。進行方向右側に席を占める。北側になるので撮影に向いていると思ったためだ。

ちなみにローカル線タイプの列車を有り難く思うのは、撮影時に窓が開けられることだ。窓ガラスの汚れや、ガラスに反射して映り込むカメラなどのゴーストを排除できる。長閑に走って行くローカル線ならば、吹き込んでくる風も大したことはない。



ノートまでの列車と車窓風景。

定刻10時25分、ノート駅に到着する。無人駅で、駅前広場に数台の車が駐車しているものの、タクシーはなく、観光案内所はおろかバルや商店も全くない。どちらへ踏み出したものか、情報を求めてうろろしていると、中学生くらいの小僧が二人来てタバコをくれと云う。凶々しい態度に腹を立て、言下に断った。タバコなど持っていないからいずれにせよ断るしかないのだが。

広場の一角に市街平面図立て看板を見付け、ようやく踏み出すべき方向と、宿の位置を知ることができた。ノートの旧市街は小高い丘の上にあり、ともかく坂道を登らなければならない。キャリーの取っ手にバンドを掛け、肩掛け牽引方式で歩き出した。

急な坂道ではなかったけれど10分も歩くと嫌になってくる。至近の距離にあると期待していたB&Bが営業していなかったことも、気分的に落ち込む原因となる。そんな時、左折するとホテルがあることを示す看板を見て迷った。

そちらの方は見たところ新興住宅街だし、今までせっかく登ってきたのに、そちらへの道は下って行く。アグリジェントのように旧市街の懐と云ったところに泊まりたい気持ちがあり、しかしそのためにはまだだいぶ坂を登らなければならないのに、その労力が報われる保証はない。しばらく思案した末 —— まだ11時前だから、そのホテルに不満があれば、改めて旧市街まで歩こう —— と決断した。

坂道を下って4、5分、Hotel Della Ferlaが見えた。小体な所は好み、風格や由緒が感じられないのは残念、しかしほとんど泊まる気になってロビーに入る。フロントには三十前後の男女がいた。どうやら兄妹らしい。

二人とも笑顔で迎えてくれたけれど、英語を話すのは妹だけだ。料金は一泊朝食付き45€ (6,511円)とのことだ。彼女はざっと見たところ、身長170センチ体重90キロと云ったところか。しかし体型に比べて動作は身軽で、部屋の下見は彼女が先に立って案内してくれた。

二階の突き当たりにある部屋は広々してバルコニーも付いている。建物全体が新しいので、設備も問題ない。ドアを開けてバルコニーに出てみると、隣は果樹園で、オリーブの実を収穫中であつた。勤め人が週末を利用して作業しているように見受けられ、その長閑な感じも良いし、住宅地の奥まったところに位置するから、騒音は心配する必要がなさそうだ。二泊することに決めてチェックインする。

## 18世紀バロック建築の華

一休みして旧市街を見物に出る。フロントで市街平面図を貰い、お勧めの食堂とスーパーマー



駅前広場の市街平面図と Hotel Della Ferla、全15室。



「王の門」に通じるマルコーニ並木道、11時40分。地元の人達がほとんどで、土曜日らしいのんびりした雰囲気が漂う。

ケットの所在をマークして貰った。インターネットはフロントにあるPCを無料で使わせてくれるとのことだ。11時20分ホテルを出発する。

キャリーで引っ張っていた荷物が高々10キロであったとはいえ、これがなくなれば身軽さは歴然とする。先程嫌気がさしたところをすぐに通過し、さらに気分良く10分ほど坂道を登り、マルコーニ並木道から王の門(Porta Reale)を抜けて、旧市街

の背骨とも云えるヴィットーリオ・エマヌエーレ大通りに入った。そこ此処のベンチは、疾うにリタイアしたジイサン達が悠然と腰掛けている。人通りは多いものの、観光客の姿はあまり目立たない。

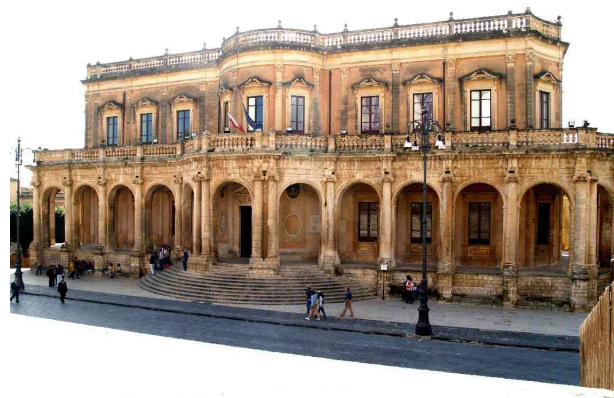
この通りの両側に、18世紀バロック建築の華と呼ばれたこの街の主要建造物が並ぶ。まず右側に幅の広い階段を前景に、サン・フランチェスコ・アッツリンマコラータ教会が堂々と聳えていた。内部は白を基調とした清楚な感じだ。次いでサンティッシモ・サルヴァトーレ修道院も重厚な建造物だが、内部は公開されていないかった。

由緒ありそうな建物に入居している商店やカフェもある。ショーウィンドウで見掛けた鞆が洒落た感じだったので撮影し、帰国後調べたところ、「ナイオレアーリ」なるブランドのオリジナル商品だった。



中央にサンティッシモ・サルヴァトーレ修道院の鐘楼。右側はサン・フランチェスコ・アッツリンマコラータ教会。

右側に改修工事中的のカテドラルが見えた。足場で覆われ、在りし日の外観が巨大な写真として表面を被覆している。駅近辺からずっと見え隠れしていたものだ。「芸術と歴史の島 シチリア」にはこのカテドラル中央に聳える大キューポラの写真が載っているけれど、1996年に突如崩壊したらしい。現在はカテドラルに近付くことさえできない。



上: 改修工事中的のカテドラル。下: ドウチェーツィオ館(市庁舎)。

優雅なファサードを持つドゥチェーツィオ館(市庁舎)の内部は、博物館の類らしいが見ずに通り過ぎた。すぐ隣には聖カルロ・ボロメオ教会がある。礼拝堂は此処もまた白を基調とした清楚な感じだが、とりわけ興味を引くようなものもなく、一巡して終わり。

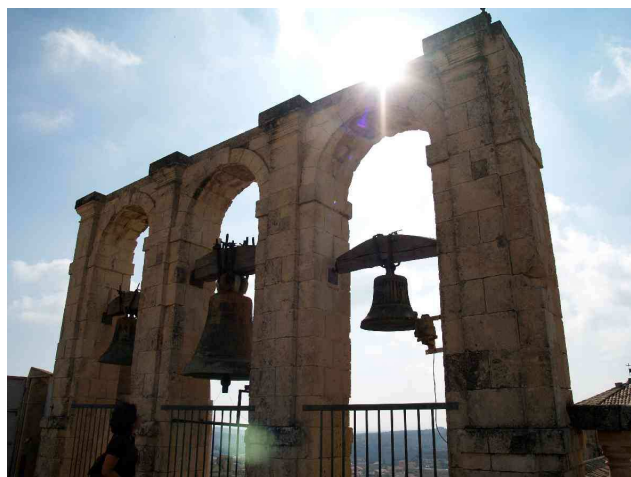
しかし1.5€(217円)を支払うと、屋上を見物できる。高いところから見下ろす古い都市は、見ていて飽きないことが多いのに、シチリアではそのような機会に恵まれずに旅してきた。

数十段の石段を登って出た屋上には、中年のカップルが一組いるだけだった。周囲は1メートルほどの高さで石が積み重ねられ障壁をなし、さらにその上に1メートルほどの鉄柵が設けられている。この鉄柵のお陰で、障壁の上を歩くことができる。

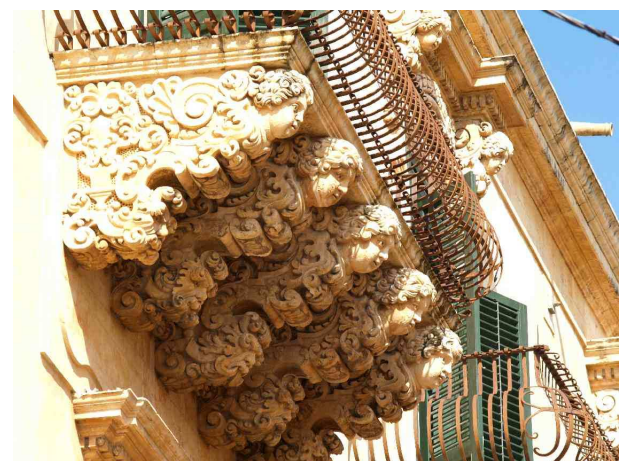
つい先程、辿ってきた通りを振り返り、これから訪れるのに面白そうな建物や路地を探し、「芸術と歴史の島 シチリア」の記載で知った、15世紀以前の古いノート(遺跡)らしい遙かな小高い丘を遠望し、10分間ほどではあったが、1.5€は充分もとを取ったようだ。

聖カルロ・ボロメオ教会を出て、メインストリートと直交するニコラーチ通りに踏み込んだ。教会に寄る前からその佇まいが気になっていた通りだ。坂道を登って行くと、左側に(過剰ではあるが)見事な石彫りの装飾を施したバルコニーが連なる。バルコニーごとに意匠が異なり、そしてそのパーツごとが(手作りだから当然かもしれないけれど)全部異なっている。詳細に吟味して行くときりがなく、己の能力を遥に超えたことと思うから、気になったバルコニーを撮影しながら、あまり一カ所にとどまることなく移動した。

後から「芸術と歴史の島 シチリア」で調べると、この建物はニコラーチ・ヴィツラドラータ館と呼ばれ、「バロックの華」の主たる一つらしい。



上: 聖カルロ・ボロメオ教会屋上の鐘と眺望。下: 左側に見える幅広い階段はカテドラルに続くもの。その向こうのファサードは、サンティッシモ・サルヴァトーレ修道院。



ニコラーチ通りで、バロック様式のバルコニー基部。



コムナーレ・ヴィットリオ・エマヌエーレⅢ劇場。今は人口数万の小都市だが、かつての栄光を偲ばせる。ちなみに comunale をインターネットで検索すると、これを冠した劇場や宮殿は多数ある。聖人の類かと辞書で調べたら「市町村の、地方自治体の、共同体の、共同の、共同所有の」の意だった。



カルミネ教会とそのフレスコ画。

### 大衆食堂カルミネ

「バロックの華」にもいささか食傷したような気分だが、まだ時刻は12時半、もう少し街見物を続ける。ヴィットーリオ・エマヌエーレ大通に戻り、西進を続行した。寄り道しながらも目指す方向は、宿の勧めでくれた食堂「カルミネ」だ。

紆余曲折しながらその前に辿り着いたのは、12時40分だった。店の中に動きはあるものの、ドアは閉ざされている。1時に開店と見定め、すぐ目の前にあるカルミネ教会に立ち寄った。

こぢんまりした教会だけれど、趣味が良く、そして日常的に信仰の場として機能しているような暖かみを感じられる。今はミサなども行われていないため、見物人の方が多い。三組のカップルが三、四歳から小学校低学年くらいの子供達五人を連れて現れた。場所柄、親の方は何とか静かにさせようと努めていたが、そんな制止

はお構いなしにはしゃぎ廻るはずの小僧達だった。

教会を後にして食堂へ行く。1時前であったがドアは開いているので、入ると中にベビーカーを押した若い母親がいた。どうやらこれは身内で、開店はまだらしい。それでも追い返されることもなく、テーブルに置いてある、ラミネートコートされたお品書きの検討を落ち着いてすることができた。メインは既に決まっている。宿で店を訊いたとき、一緒に教えて貰ったお勧めメニューの兎だ。

これに加えて、「お店のアンティパスト」と銘柄お任せで赤ワインを一壺。ワインを飲みながら待っていると、アンティパスティとは別の一皿が出てきた。これが酒のつまみとして旨い。お通しのようなものかもしれないけれど、日本のそれよりも、質量共に充実している。貧乏学生の頃であれば、一晩の酒につまみはこれだけで満足していたかもしれない。アンティパスティも登場する。



大衆食堂カルミネ。左上：お通し(?)のチーズ、サラミ、フリッター、ジャガイモ。右上：アンティパスティのオリーブ、乾燥トマト、シャンピニオン、ピーマンなど。左下：兎料理。右下：悪童とその家族。

この店は、テーブルクロスの代わり(上に)紙を敷いていることから明らかなように、ごく庶民的な店で、料金も安い。しかし出されたものは十分に旨かったし、窓外に視線を巡らせば、カルミネ教会のファサードが間近に見える優雅なロケーションに恵まれている。そんなことでいつもにもまして昼食を楽しむことができた。

辺りが多少騒がしくなったのは、先程教会で見掛けた悪童連れの家が現れたためだ。しかし子供達のはしゃぎぶりは相変わらずだが、どこか憎めないところがあり、見ているこちらの気分を寛がせる。

満足の昼飯勘定はアンティパステイ3.5€(506円)、兎6€(868円)、ワイン4.5€(651円)と格安だった。ちなみにこの兎料理(Coniglio Stimpirata: コニツリオ・スティンピラータ)はインターネットで調べたところ、この地方の郷土料理らしい。ウサギ肉とにんじん、ジャガイモ、たまねぎを弱火で蒸し煮したもので、いまでは食べられるレストランが少ないとか。

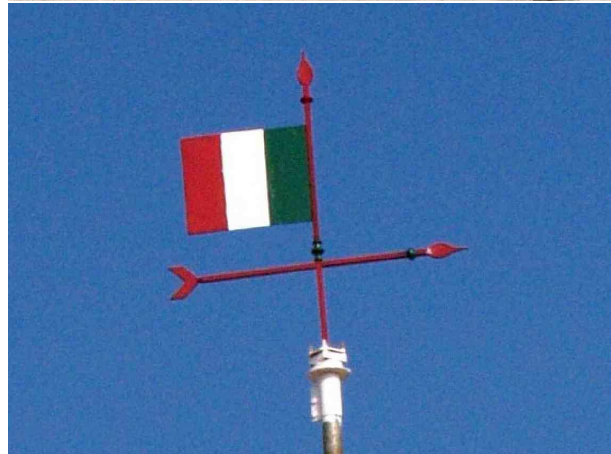
満ちたりた気分ですらに道を拾って宿へ帰る。小さいロビーの片隅にあるカウンター内に、六十過ぎのオヤジがいて、泊まり客と判ると(イタリア語で)コーヒーを勧めてくれた。フロント付近にいた兄妹も言葉を添えるので、カプチーノを頼む。どうやら兄妹の父親らしい。たった一杯のコーヒーでも、何となく場が和む。家族経営の宿、それも小規模なところの良さだろう。

部屋に戻りバルコニーに出てみると、隣のオリーブ畑は地面に敷かれたブルーシートも、その上にはたき落とされたオリーブの実もそのままだ。昼休み中なのだろう。温度計を見ると25℃ある。ドアを開け放したままベッドに横たわった。

1時間半の午睡から覚め、再び街へ出たのは4時を廻っていた。明日も此処に滞在する予定なので、見物とか探訪と云った感じよりも散策気分であつたけれど、それでもまた訪れていないところへ足が向く。王の門からヴィットーリオ・エマヌエーレ大通りまでは午前中と同じであつたが、さらに坂を登り旧市街の北部へ行く。

この地区にはこれといった見所がないため、観光客の姿を見掛けないのは当然として、商店なども少ないせいか人通りがあまりない。折から曇り空に変わってきたこともあり、街並みから受ける印象はくすんで地味なものであつた。

旧市街の最北部と云って良い辺りに、サンティッシモ・クローチフィッツ教会があり、「芸術と歴史の島 シチリア」に「未完成」を印象づけられた写真があり、そちらへ寄る。意外に内部は瀟洒な教会で、未完成に終わったのはファサードのバロック洋式門だけらしい。



大衆食堂からの帰途目を惹いたもの。上: 中流の家がごくさりげなく鑄鉄製の柵を使用。下: イタリア国旗をかたどった風見。



サンティッシモ・クローチフィッツ教会では、神父が子供達を集めて授業を行っていた。



猫の餌と水。こちらならパスタを食べて当然と思うが何か可笑しい。

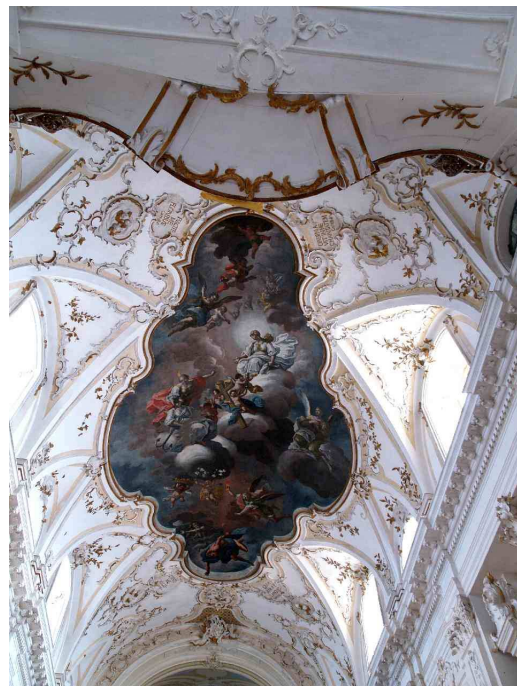


ラ・ローザ通り。

南へ方向を転じ、トリゴナ通りを右折すると、外観はどこか荒廃した教会がある。市街地図には聖女アガタ教会と記されていた。細く正面の扉が開いていたので中へ入ると、天井のフレスコ画などは修復されたばかりのようで、一方床面には資材や足場などが乱雑に置かれている。中央付近で打ち合わせ中の六、聖女アガタ教会の天井。七人から受ける印象は、画学生を彷彿させられた。ひょっとするとボランティアが作業を受け持っているのかもしれない。

蛇行しながらも概ね下って行くとローマ通りに出た。旧市街を迂回する準幹線道路で、宿は近い。スーパーマーケットに寄り、ミネラルウォーター(炭酸)500cc0.3€(43円)、オレンジ515g0.77€(111円)、ミルク1ℓ1.58€(229円)、オレンジジュース1ℓ1.29€(187円)、レジ袋0.05€(7円)など。宿へ帰り着いたのは6時になっていた。フロントでインターネットにアクセスさせて貰う。

住宅地にある小体なホテルで迎えた夜は、ひたすら静かであった。12時ころすぐ上の階を歩き回る音が暫時響いてきたけれど、それがすぐ収まってしまうと、余りの静けさに耳鳴りがする始末だった。



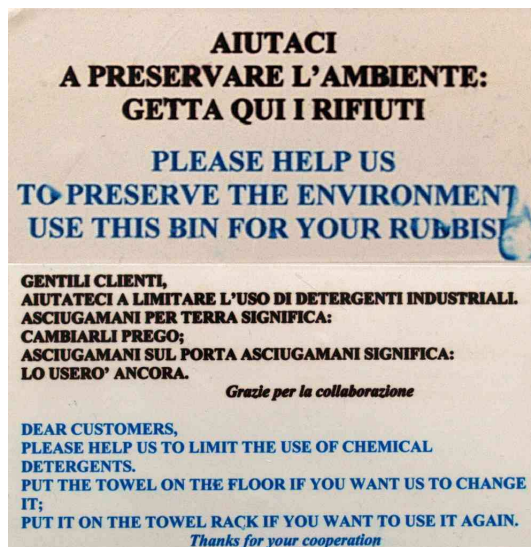
聖女アガタ教会の天井。

### サマータイム終了

夜明けが一時間早くなった。このようなことが起きるのはサマータイムのマジックで、今朝の午前1時をもって、サマータイムから標準時刻への切り替えが行われたためだ。10月最終日曜日の早朝というタイミングは、一番混乱が起きにくい時刻と云うことであろう。この日の旭日昇天は6時23分だった。

7時になりバルコニーに出てみると、穏やかな晴天だ。朝食までは一時間あり、その間の過ごし方を思案したとき、片隅にセットされた物干しが目に入った。

もう一泊することも含めて、下着を洗濯するのに幸便だ。一時間かけ(洗剤やすすぎのお湯につけ込んでおく時間が長かった)洗濯し、バスタオルに挟んでから、丸めて踏みつける。

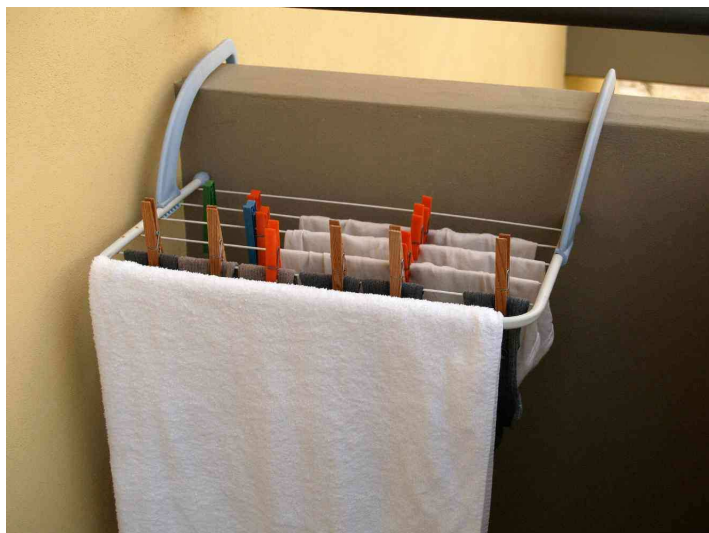


浴室に貼られた二枚のシールを見ると、この宿の環境問題に関する意識の高さが判る。シチリアでは珍しかった。



この方法は永六輔の著書から学び、乾燥を速めるのに効果的だ。下着を干してから、手前にこのバスタオルも干すと、目隠しも兼用できて気に入った。

8時を少し過ぎてから朝食を摂りにロビーに下りると、既に三組の家族連れがいて、テーブルの空きは一つあったけれど、宿の若主人は中庭へ導いてくれた。昨日の午後、カプチーノを屋外で飲んだことから、こちら



バルコニーにあった物干しを利用する。

の好みを察してくれたらしい。席に着いて見上げると青空が気持ち良かったし、20℃以上あるから寒いようなことはない。

9時を廻って街歩きに出掛ける。まず明日の出立に備え、駅までの最短路を確認した。坂道を下って3分で辿り着き、昨日の遠回り15分とは大違いだ。ちなみに駅前広場の端には Hotel Della Ferla の所在を示す道標があった。見落としは多いものだ。

駅からは昨日と同じ道を途中まで辿り、マルコーニ広場を経由して旧市街へ入る。日曜日はいつもそうなのか、至る所で談笑するジイサン

達を見掛けた。ヴィットーリオ・エマヌエーレ大通りは昨日以上に雑踏しているが、買い物客が多いようだ。

既に訪れたサンティッシモ・クローチフィツ教会をもう一度見に行く。「芸術と歴史の島 シチリア」に「美しいバロックの門」と解説されているのが、印象と異なっていたためだ。しかし結局「美しい」と感じることはできないままであった。

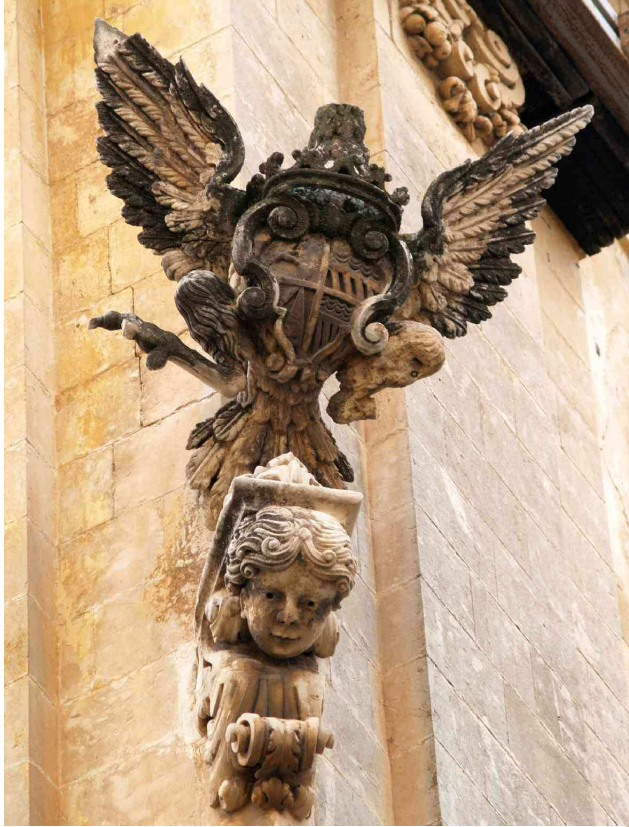
近付くことのできない大聖堂も、北側の高台からは工事の様子を瞥見できる。96年にキューポラが崩壊したことは、「芸術と歴史の島 シチリア」から知ったが、それ以上の情報はない。しかし工事は改修などといった程度ではなく、キューポラの立ち上がり部分から、完全な作り直しだ。よほどの大惨事であったかと想像される。



街頭にはジイサン達の姿が目立った。



再建工事中の大聖堂キューポラの立ち上がり部分。



トゥリゴナ・カニカラオ邸(18世紀)の北西角で見たアクロテリウム。

寄り道や蛇行をしながらもヴィットーリオ・エマヌエーレ大通りを西へ行き、そして戻り、見るに値するような路地は全て歩いた気分になる。そこで外部から見たノートはいかばかりかとテーマを替えることにした。

北へ行けば上りが続き、やがてなだらかになっているようなので、街を見下ろすことは不可能と予想される。南側は、昨日聖カルロ・ボロメオ教会の屋上から眺めたところ、さほど離れていないところに小高い丘があり、住宅地になっている。これを目指すことにした。ローマ通りを横切ると、まもなく市街平面図の外になる。



ヴィットーリオ・エマヌエーレ大通りで見た集合住宅(?)。一階は商店になっている。

しかし目指しているのは、はっきりした地点ではなく —— 小高く旧市街が見晴らせる場所 —— だから、これを探すのに平面図はなくても同じことだった。

半時間ほど彷徨い、見晴らせる場所はなさそうだと思うようになった。小高い場所はあるものの、建ち並ぶ家々に遮られてしまう。もしツテや縁故があり、民家の二階、さらに望ましくは屋上に上がらして貰えれば、多分それなりの眺望が開けるのであろうが、生憎なことにそのようなものはない。

諦めて北へ針路を変更した。まもなくローマ通りと交差し、右を見ると宿から最寄りのスーパーマーケット



左上: 劇場そばのB&B。立地と雰囲気には惹かれた。右上: 南側から見る旧市街。左下: 蚊取り線香立てがあるからには蚊取り線香が利用されているのだろう。宿の玄関脇植木鉢で。右下: 物干しを直射日光の当たる位置へ移動。

トがある。日曜日のせいか閉店していたけれど、これで現在位置がはっきりした。此処まで来たのならば一旦、宿へ戻ることにした。

昨日同様バーカウンターにいた親父にコーヒーを勧められ、玄関脇の丸テーブルで青空のもと一服する。部屋に戻り、掃除が終了している様子なので、バルコニーの洗濯物を直射日光が当たるように場所替えし、目隠しのバスタオルを浴室へ戻した。昼飯には早いし、見物したいところもなく、持参した本を読んだりして時間を潰し、まだ早いと思いつつも12時に再び街へ出る。

## 高級レストラン、レウラーリエ (Ristorante Le Ularie)

この日目指したのは、昨日教えられた三軒の一つ、リストランテ・レウラーリエだ。少しでも時間の掛かるように、マルコーニ並木道からヴィットーリオ・エマヌエーレ大通りを抜け、ローザ通りを南下した。それでも店の前に着いたのは12時20分だった。

案の定開店前だ。しかしドアが半開きになり、中で動く人影が見えた。入ってみるとテーブルの準備をしていたウェイターは英語を話す。開店が1時であることを聞き、ついでに予約もした。日曜ということもあるし、念のために。

旧市街で僅かに足を踏み入れていなかった、西端部を探訪して時間を潰す。雰囲気は良いがこれといった収穫もない。そのうちに一軒のレストランに気付いた。中庭で食事ができるような写真入りポスターが貼り出されている。

天気が良かっただけに、これには随分惹かれた。しかし既に予約が成立していることだし、これ

を解約に行き、再び此処へ戻ってくるほどの執念はなかった。「逃した魚」あるいは「隣の芝生」の類で、利用できなかったが故に、より魅力的に感じられたのかもしれない。

一回りし、1時にはなっていないけれど、レウラーリエに入る。既に二組がテーブルに着いていた。いずれも中高年の普段着姿で、常連らしい雰囲気だ。ほどなく先程のウェイターが姿を現したので、お品書きを求めると、そのようなものはないという。要するに、日々旬の食材を揃え、それに適した献立を考えるので「お品書き」は準備できないらしい。

——— その代わりに、私が今日の献立を説明する ——— とのことだが、これには困惑した。そもそもこちらの英語力に不足がある上、シチリア食材名と料理に関する知識不足の、いわば三重苦だ。しかし今更逃げ出すわけにも行かず、ともかく彼の説明を聞いた。

それなりに親切な説明であったものの、さっぱりイメージが湧いてこない。

値段の提示もなくいわば全て「時価」と云うのも、気持ちを怯ませるものがある。こちらの食事料金がそれほど高くないことを考えれば、酷いことにはなるまいと見切り、アンティパストの盛り合わせ、お勧めパスタに赤ワインとする。ワインの方はリストが提示されるが、これを見て判るはずもなく、シチリア産であることと値段がそこそこのエトナにした。



ヴィットーリオ・エマヌエーレ大通りの風船売り。



リストランテ・レウラーリエ。

アンティパステイはそれぞれ良質だが、面白味のないものであった。昨日の大衆食堂の方が良かったなど思いながら、これをツマミにエトナを呑む。次々客が訪れ、半時間しないうちに、さほど広くない店内は満員になる。早めに来て良かったらしい。

パスタはきしめんに形状の似たタリアテッレだった。美味と記憶しているが、詳細は不明。一時間ちよっとの食事を楽しみ、勘定の席料2€(289円)、ワイン18€(2,604円)、ミネラルウォーター2€(289円)、アンティパステイ7€(1,013円)、スパゲッティ7€(1,013円)をカードで支払う。テーブルにチップ2€(289円)置き、店を出た。

仄かな酔いを楽しみながら、ぶらぶらと宿へ向かう道すがら、ノートの食堂二軒に関して考える。似ているのはどちらも美味であったことと、常連になればさらに楽しめそうなことだ。異なるのは大衆食堂と高級レストランということか。値段も三倍近い開きがある。総合的にどちらを高く評価するのか考えると、食通であればレウラリーエを選びそうだ。そして非食通の私は大衆食堂カルミネを。

### カード紛失

10月31日月曜日にも晴れだった。気温は 18℃。朝食は案内されるのを待たずに中庭に出る。仰ぎ見る青空はこの日も爽快であった。次の目的地モディカへ行く列車は、日に9本ほどだが、10時41分発が手頃で、11時50分の到着予定だ。

ゆっくり支度をし、忘れ物がないことを慎重に確かめてロビーに下りる。勘定は二泊分にミニバー(備え付け冷蔵庫)から取ったミネラルウォーター(炭酸)500cc1€(145円)を加えて91€(13,166円)だ。ところがいざ清算しようという段になってビザ・クレジットカードが見付からない。

列車の時刻は十分な余裕を見込んでいたので、ロビーの朝食用テーブルに荷物を広げて、徹底して調べる。10分ほど虚しい努力を続け、カードの紛失が確実になった。取り敢えず支払いは予備のクレジットカードで済ませて、対策を思案する。

レウラリーエの支払いはカードで済ませ、その伝票もあるから、あの店に置き忘れた可能性が高い。掏摸その他の可能性はまず考えられない長閑な街だ。カードを諦めて(失効させて)旅を続ける手もあるけれど、カード一枚(JCBを入れれば二枚)だけであと二週間は、僅かながら不安がある。現金調達用の citibank 残高に不安があったためだ。

今回の旅立ちに当たっては、長年の慣れから来た気の緩みにより、何かと手拔かりが多かった。銀行残高を確かめなかったこともその一つだ。2004年秋に旅を終えた際に調べたときは50万円ほどあったような気がするものの、もっと少なかった可能性も否定できない。海外キャッシングでは伝票を印刷しても残高は表示されないのだ。

取り敢えずフロントにレウラリーエへ電話で問い合わせることを頼んだが、10時半では応答がなかった。しかしこの時点でカードが回収できる可能性をほぼ間違いなしと見込み、ノートにもう一泊することを決断した。昼を過ぎてもモディカへの移動は可能だけれど、ばたばたするのが嫌であったし、宿の居心地良さも気に入っていたことに加え、残る旅行日数に対して訪れてみたい所が不足しているという事情もあった。

同じ部屋へ戻ると、バルコニーへのドアを開け放し、ベッドに寝転がって本を読む。隣の果樹園

で一昨日、昨日と行われていたオリーブの収穫作業も今日は止んでいる。やはり想像したように、勤め人の休日作業であったのか。住宅地の午前中はひたすら静かだった。

12時になって、フロントから再度レウラリーエへ電話して貰ったところ、幸いなことにカードは保管されていた。

### 海浜ノート(?) (Noto Marina)

開店前のレウラリーエを訪ね、極まり悪い思いをしながらカードを受け取り、郑重に礼を述べる。その足で6、7キロ南東にある海浜ノートを目指した。部屋で待つあいだ道路地図などを見ながら、あれこれ思案した午後半日の過ごし方だ。

ノートの街外れから国道(?) 115号線を歩く。相互二車線くらいの幅広な車道に、歩道も完備しているけれど、往来する車両は少ない。高速道路は建設中だから、唯一の幹線道路なのにこの状態は、シチリア南東部の産業的な不況を反映しているのだろうか。

1キロほどで115号線は左へ大きくカーブして行き、直進する地方道はすぐに踏切を渡る。この線路はノートから分岐しパッキーノを終点とするものだが、既に廃線となっているようにも見えた。往来する自動車は一段と少なくなり、のんびりした歩行を楽しむことができる。

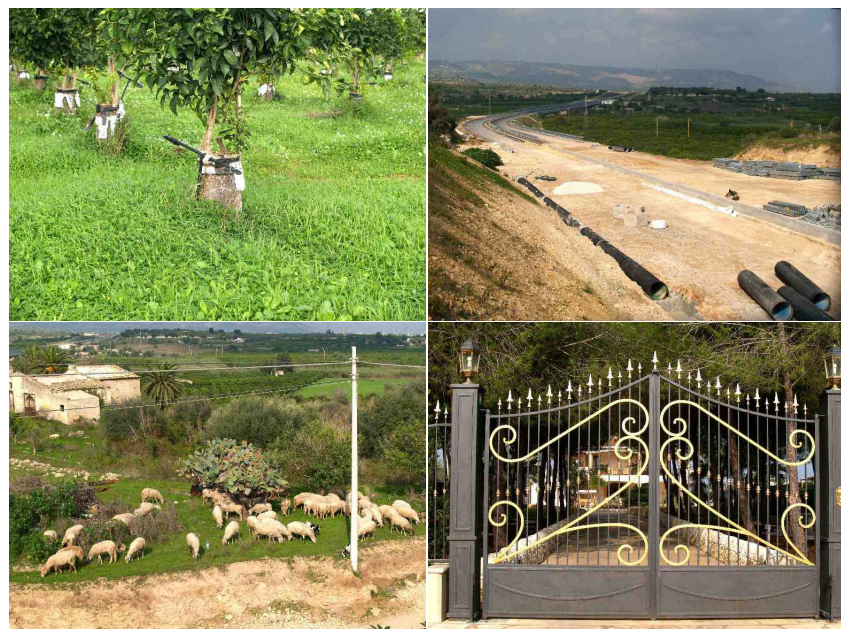


左上:シラクサへ続く115号線。右上:郊外では道標が頼りになる。左下:ノート旧市街を振り返る。中央やや左に小さく大聖堂。右下:1時16分に海が見える。

道の両側にはオリーブ果樹園が多く、そこ此処で収穫作業が行われていた。宿の隣と違い、こち

らはプロと云うことだ。しかし地面にブルーシートを敷いて、果実をはたき落とすやり方は同じであった。振り返るとノートの旧市街が遠望される。

ノートを出発してから50分足らずで海が見えた。ただ海であると云うだけで、素晴らしい風景でもないのに、それでもなぜか心が沸き立つ。しかし —— 海岸は近い —— と思ったのは早計で、海縁へ辿り着いたのはそれから半時間以上経っていた。



左上:オリーブを接ぎ木しているらしい。縛り付けられている黒いパイプは散水設備。右上:建設中の高速道路。左下:これまで見掛けなかった羊の放牧。右下:立地から別荘とも思えないが、辺鄙なところに豪邸がある。



砂浜を水着姿の女性が一人、犬を連れて散歩していた。

三叉路に出た。道標があるので持参の道路地図を参照しながら現在位置を確認する。それから5分ほどで渚が見え、さらに10分ほど行くと、大規模なリゾートホテルや別荘風の建物が建ち並んでいる。しかし人通りはなく、ホテルも営業しているのかはっきりしないような状態だ。

遠く砂浜に犬を連れて散歩する人影が見えた。近付いてみるとビキニ姿の女性だ。

季節はずれのリゾートらしい物憂げな印象が強調される。

2時を廻っているので食事場所を探す。さっぱりそれらしいものがなく、寂れたリド・ディ・ノート駅前も飲食店はおろか商店さえない。ともかく前進を続けること10分、砂浜と道路に挟まれたリゾートとビジネスの中間を思わせるこぢんまりしたホテルを見つけた。

食堂らしい部分を覗くと客とウェイターが一人ずついるから、営業しているらしい。声を掛けるとジイサンウェイターが対応してくれた。イタリア語ではあるがとにかく食事はできるらしい。先にトイレを使って戻ると、フロントにいたらしい三十くらいの男がメニューを持ってきた。彼は英語を話す。テラス席に落ち着き、海鮮スパゲッティと白ワインをピッコロで注文する。

浜辺はすぐそこなのに見えないのが残念で、さらに云えば車道に隣接している。しかし小一時間の食事中に通過した車は二、三台であったから、騒音や排気ガスに悩まされるようなことは全くなかった。

ワインはすぐに運ばれてきたものの、スパゲッティの方は呑みながら20分以上待たされた。しかし逆に云えば注文を受けてから、きちんと調理したらしく、味については期待を大幅に上回るものであった。思いがけない展開で訪れた海浜で、このような不意打ちは嬉しい。ふと ——— この宿に一泊して。 . . . ——— の思いが浮かんだほどだった。

最後にカプチーノで締めくくり、料金は席料2€(289円)、スパゲッティ8€(1,157円)、ワイン500cc3€(434円)、カプチーノ1.5€(217円)だった。チップを含め15€(2,170円)支払い、気持ち良く席を立つ。



ホテル・ミーティングクラブとその海鮮スパゲッティ。

渚沿いの開放的な道路を引き続き南下する。途中二、三軒の営業中かどうか判らぬようなリゾートホテルを横目に、半時間で左パッキーノ、右ノートの道標がある三叉路へ出た。地図から想定していたルートを確認に進んでいることに気をよくする。右へ曲がり海浜風景と別れを告げる。

海辺を離れると民家もすぐ途絶え、両側に畑の広がるなだらかな地形を横切って進んだ。半時間ほど歩いて、彼方にノ

ートの旧市街が見えだしたころ、後方から接近する自動車のエンジン音が聞こえ、横に来て停車した。食料品の配送でもやるらしい小型の箱形トラックを運転しているのは三十くらいの男で、街まで乗せてやるということらしい。

日本国内を歩いているときは —— 歩くことを楽しんでいるので —— と説明し、乗車は遠慮することがほとんどだけれど、イタリア語で説明することなどできようはずもない。4時を廻り、辺りに黄昏の気配が漂い始めていたこともある(ちなみにこの日の日没時刻は5時8分)。「グラッツィエ」といって助手席に滑り込んだ。

会話が成立しないので、少しばかり気詰まりであったものの、それほど長い時間ではない。数時間前に辿った道に合流し、後は現在位置を把握しながら行く。宿へ一番近い地点は通り過ぎたが、旧市街を離れるようであればそこで降りて貰うつもりでいた。結局マルコーニ広場で停車する。

こんな場合にごく軽く感謝の気持ちを託せるよう、持参していた「千代紙ミニチュアセット」をカメラバッグからだし、電子辞書で表示した bambino (子供)を見せながら渡す。要するに —— あなたのお子さんへお土産にでもしてください —— と意思表示したつもりだ。子持ちであったかは不明だけれど、とにかくこちらの好意は通じたらしく、気持ち良く受け取ってくれた。

薄暗くなり始めた道を下り宿へ。部屋へ戻ってから酒の切れていることに気付く。既に辺りは真っ暗になっているが、スーパーマーケットまで徒歩3分は有り難い。ウォッカ1本7€(1,013円)を無事購入。この晩も相変わらず静かな一夜だった。

## モディカ

明けて11月1日も晴れが続いている。10時にチェックアウトした。支払いはいびざ・クレジットカード

で行い、無事回収できたことを兄妹にそれとなく伝える。無言のコミュニケーションは上手く行き類笑みが交換された。向こうは「良かったね」の祝福、こちらは「面目ない」の苦笑い。

ノート駅へは荷物を引っ張っていても5分で楽に着く。駅前広場の道標をもう一度眺め、一昨日の行動がやはり自然であったかと一人納得した。駅は無人駅で待合室も閉まっている。中央部にある切符自動販売機をじっくり観察した。



高速道路の工事現場。三時間ほど前に見たものの続きだが、どちらも休日ではないのに稼働していないのが不思議に思われた。



街を離れる前にノート駅前広場の道標を改めて見て、Hotel Della Ferla へ直進できなかったのも無理ないと思う。二軒の B&B、旧市街、観光案内所、全て右へ行くことを示しているのだから。